十四歳

〈登場人物〉

浜野雄二（『南の島のオンバシラ』で牛山家の長男、牛山太郎を演じる）

小沢透（同じく次男、牛山次郎を演じる）

黒木和彦（同じく三男、牛山三郎を演じる）

山口静江（同じく母、牛山スミを演じる）

加藤綾子（同じく牛山三郎の幼馴染、中澤春美を演じる）

岡崎伸一（同じく牛山次郎の戦友、有賀宏典を演じる）

武井直子（同じくテニアン島チャモロ族のマルコを演じる）

＊長野県岡谷市市立北中・昭和五一年卒業の三組の同級生。

1

舞台は前後二面で構成。便宜上、A面（前）、B面（後）とする。B面が五十センチほど高く、A面と階段でつながる。B面の四隅に円柱が立つ。客席からは社殿のようにも見える。

まるで吃っているようなラッパの音。やがて調子が出てくる。進軍ラッパから突然、大音量の突撃ラッパと歓声に。音が止み、スポット。舞台A面に浜野雄二が立つ。

浜野　昭和四八年の八月、南の島の子供たちが日本にやってきました。リトルリーグの

大会があったのです。その際、縁があった信州長野市の人々に招かれ、様々な歓迎行事が催されました。総勢三十名、十一歳から十四歳の子供たちとその保護者で、全員島の原住民チャモロ族です。一行は善光寺にもお参りしました。南国の子供たちは雪を見るのを楽しみにしていましたが、夏でしたのでそれはかないませんでした……これは公式な記録には残っていませんが、滞在中、チームと別行動をとった一組の親子がいました。父親と息子が向かった先は、長野市からずっと南に下った諏訪でした。彼らがめざしたのは諏訪大社。全国に一万余もあるといわれる諏訪神社の総本社です。諏訪大社は諏訪湖をはさんで上社と下社があります。さらに上社には前宮と本宮、下社には春宮と秋宮があります。親子がどこを訪ねたのか、それよりなぜ諏訪大社だったのかはわかりません……ああ、島の名前を申し上げなかった。島の名前はテニアン。北マリアナのテニアン島です。日本から二千キロの西太平洋にあります。

溶暗。

2

明りが入ると、舞台A面に小沢透と黒木和彦と浜野雄二。

廃校になったばかりの中学校の教室。机が二つ、椅子が三つ。脇に黒板。チョークで書かれた卒業の寄せ書きで埋められている。まん中に大きく、〝さよならだけが人生だ〟と書かれている。

小沢　さよならだけが人生だ……これ、生徒が書いたのか？

浜野　教師じゃないか。

黒木　寺山修司だっけ。

浜野　唐の詩人、于武陵(うぶりょう)の五言絶句。「花に嵐のたとえもあるさ、さよならだけが人生だ」。井伏鱒二の訳だよ。

小沢　よく知ってるな、浜野。理科系なのに。

黒木　井伏鱒二って『山椒魚』の？

浜野　『黒い雨』とか。

黒木　ああ、原爆の……。

小沢　で、彼らはどこへ行ったんだ？

黒木　彼らって？

小沢　ここ、なくなったんだろ。我らが母校、岡谷市立北中がなくなって後輩たちは四月からどこへ行くんだ？　少なくなったとはいえ百人やそこらは残っていただろ。

浜野　小井川、小口地区は東中、今井と間下の子は西中に引き取られる。

小沢　さぞや肩身が狭いだろうな。来たり者扱いされ、いじめられ。

黒木　来たり者？

浜野　知らんか。よその土地から来てここに住みついた人のこと。

小沢　古くからいる連中が新参者を見下してそういうんだ。

黒木　いじめられたりしないよ。

小沢　いや甘い。いじめは絶対にある。廃校なんて企業でいえば倒産だ。つまり、潰れた会社の従業員をお情けで採用してくれたってなもんだろ。受け入れ先の連中からしたら、こいつらが来たせいで俺たちの職場環境や待遇が悪くなった。

黒木　喩えが悪い。

小沢　じゃあ、難民か。

浜野　もっと悪い。

小沢　いわば経済難民だな……あいつら北中出だぜなんて差別され、石を投げられ。

黒木　大袈裟だよ。

小沢　虐げられた彼らが放課後、校庭の片隅に寄り添うように集まる……誰かがつぶやく。「帰りたいよ、北中に」……と、小さな声で歌い出す美少女。「**北極星の輝きを我らが理知の光とぞ……**」

浜野　何で美少女なんだ（笑）。

小沢　ほかの子らも一人、また一人と加わる。やがて全員が歌い出す。肩震わせ、頬伝う涙……ダメだ。俺泣けてきた。

浜野　アホか（笑）。

黒木　俺たちの頃は市内四中学で北中が一番生徒が多かったのに。

浜野　三学年で六百人くらいいたかな。

小沢　市内対抗の陸上大会でも球技大会でも北中がいつも優勝。諏訪清陵、二葉の合格者数もトップ。それがいつのまにか落ち目になって、あげくに生徒数激減で廃校とは哀れなもんだ。

浜野　しょうがないよ。大日本ピストンリングも三共精密も、ここらの大きな工場がみんな海外へ出ちまったんだから。下請けも引き連れて。

小沢　中国か。懲りないなあ。長野県人は満州の開拓団に大勢参加して、敗戦後えらいめにあったんだぜ。

浜野　北中の生徒の親の勤め先がごっそりなくなったんだからしかたないさ。でも西中や東中だって、この先存続できるという保証はない。ここら全体が落ち目になってるから。

黒木　本通りの商店街もずいぶんさびれちゃったね。

小沢　シャッター通りは全国どこも。

浜野　子供がどんどん減ってる。そのうちこの町に中学校は三つもいらなくなるさ。南中だってかなり少ないし。

小沢　それならまとめて南中に引き取ってもらえばよかったのに。

浜野　あそこまで通うのはたいへんだ。

黒木　そうだよな。

小沢　きたない町になっちまった。

浜野　何だよ、それ。

黒木　岡崎が怒るぞ。

浜野　幹事さん、愛郷心人一倍なんだから。

小沢　北中がなくなったんだろ。北がない。

きたないだ。

浜野　くだらねえ。

小沢　この際名前を変えればいい。東西南北揃わないなら。

黒木　そうもいかんだろ。

小沢　もともと安易なネーミングだ。

浜野　一番わかりやすいからな。

小沢　三つなら白（しろ）中、緑（みどり）中、紅（あか）中ってのはどうだ？

浜野　白に緑？　何だ、そりゃ？

黒木　麻雀だよ。

小沢　白發中、大三元。役満だ。

浜野　紅って中（チュン）のことだろ。なら中中じゃないか。

小沢　あれは生理中。

黒木　ほんとにアホだ（笑）。

小沢　球技大会は今どこが強いんだ？

浜野　西中じゃないか。俺たちの頃も万年二位だったし。

小沢　俺たちの頃って……もう二十八年も前なんだよなあ。

黒木　合唱コンクールに演劇コンクール。

浜野　ああ、文化系のもあったね。

黒木　今もあるのかな。

小沢　そんなのもあったなあ。俺はそっちにはあまりいい思い出はないが……そういや変わり者の女教師がいたなあ。

浜野　副担任の関口先生。

小沢　関口。ヒステリックなババアで。

黒木　ババアは失礼だよ。あの当時、まだ四十代。今の俺たちと同じくらいだ。

浜野　黒木は気にいられてたよな。

小沢　気にいられたなんてもんじゃない。愛されていたというべきか。別に羨ましくなかったけど。

浜野　先生、若い頃は美人だったと思うよ。

小沢　知らん……オールドミスっていうのか？　もうそういうの死語か？　しかし、普通じゃなかったよな。生徒も怖がってたが、同僚の先生たちにも恐れられてた。

浜野　頭が良くて口も達者。

黒木　芸大出だし。

浜野　同じ音楽教師の内山なんて相手にもされてなかった。

小沢　芸大出といったって、とどのつまりが田舎中学の教師じゃなあ。

黒木　東京にいたかったらしいが、家庭の事情とやらで。

小沢　詳しいね。

浜野　いまだに年賀状なんか来てたりして。

黒木　五年ぐらい前までは来てた。

小沢　ほんとかよ。

黒木　今はどうしてることやら。

浜野　綾子が知ってるだろ。

小沢　親戚だもんな。生きてるの？

黒木　まだ七十をちょっと過ぎたぐらいだ。

小沢　久しぶりの同窓会だろ。担任のじいさんは遠くて来れないんだし、こっちにいる関口に声をかければよかったのに。一応、我らが三組の副担任だったんだから。

浜野　小沢、苦手じゃなかったの？

小沢　これでも少しは大人になったから（笑）。そうだよ、黒木が来ると聞けば関口、飛んできたぞ。幹事も気がきかないなあ。

黒木　元気なのかな。

小沢　元気なんじゃないの。

溶暗。

舞台B面に明り。山口静江、加藤綾子、武井直子と岡崎伸一。小沢たちがいる教室と同じ校舎内の音楽室。中央にオルガン。オルガン付属の椅子には綾子が座る。長椅子には静江と直子。岡崎はオルガンにもたれるように立つ。

静江　湖畔病院？

綾子　もう五年になる。

静江　先生、ご家族は？

綾子　いないわ。

静江　じゃあ、こっちのご親戚が面倒みてるの？

綾子　そう、こっちのご親戚が（笑）。

直子　綾ちゃん、親戚だものね。

静江　綾子さんも行くの？

綾子　……たまに。

静江　直子さん、知ってた？

直子　噂には聞いてたけど、私なんか、先生覚えていてくださらないと思ったし。

静江　悪いの？　病気。

綾子　体はそうでもないけど、こっちが（頭を指し）。

静江　ああ……。

綾子　大分進んじゃってる。

静江　湖畔病院か……。

綾子　静江さん、行かない方がいいわよ。

静江　え？

綾子　近頃じゃもう私のことだってよくわからなくなって。妄想とか、そういうのも始まってるし。

静江　何かひどいこと言われたの？

綾子　病気だからしょうがないわ。

静江　岡崎君はお見舞いに行った？

岡崎　俺？　俺は男だし。黒木みたいに可愛がられていたわけじゃないし。加藤みたいに二代目じゃないし。

綾子　二代目とかいうの、やめてくれる。

岡崎　だって二代目だろ。

綾子　オールドミスの教師の二代目なんていわれるの、うれしくないわ。

岡崎　今、オールドミスとかいうか。

綾子　どう言い換えたって同じ。オールドミスじゃない。ミステイクのミス？

岡崎　……ミス北中だったのに。

綾子　誰が？

岡崎　あなたが、加藤綾子さんが。

綾子　知らないわよ、そんなの。

静江　綾子さん、男子に人気あったから。

直子　……うちのばあちゃんが、それだった

んだけど。

岡崎　直子のばあちゃんがミス？

直子　違う。関口先生と同じ病気だったの。

岡崎　要するにボケだろ。痴ほう症。今は認知症とかいうのか。

直子　いろんなこと忘れて。さっき食べたばかりの朝飯のことも忘れて。うちの嫁がごはんをくれないって近所中ふれまわって……母さんたいへんだった。でもね、すごい昔のことなんか、事細かに覚えていたりするの。何十年も前のことなのに、つい昨日のことのようにはっきりと。それを一時間でも二時間でも、ずっと休まずにしゃべってるの。

岡崎　脳みそで記憶の入ってる場所が古いのと新しいのとでは違うんだ。

静江　いい思い出？

直子　え？

静江　おばあさんが覚えていたのは楽しい思い出だった？

直子　あまりいい思い出じゃなかったみたい。苦しかった事とか、悔しかった事とか。私にはわからない事ばかりなのに、とにかく一生懸命しゃべるの。すごく真剣な顔して。そういうときばあちゃん、私にも敬語を使うのよ。「あなたはどう思われますか？」って。私のこと、孫だとわかってないみたいなしゃべり方。

綾子　話したくなるのよ。

直子　え？

綾子　話したくなるの。ずっと秘密にしていたようなことを。

直子　秘密？

綾子　心にしまっておいたこと。そんなのをすべてぶちまけてしまうの。隠しておきたかったのだから、そのままお墓まで持っていってくれればいいのに……周りはいい迷惑。

静江　先生に何か言われたの？　何か嫌なこととか。

綾子　……。

静江　綾子さん。

綾子　やっかいな病気よね。

溶暗。

舞台A面に明り。

小沢　綾子とどういう関係なんだ？

黒木　お母さんの従妹じゃなかったかな。

小沢　そういや綾子、似てるよ。顔つきだけでなく、雰囲気も。

浜野　遠くても親戚だからな。

黒木　あの頃の先生の年齢と同じなんだな。

浜野　歳、とっちゃったよね。

小沢　綾子もオールドミスの教師だし。信州大だが、一応国立出だし。

黒木　やめなよ。

浜野　今、オールドミスとかいうか？

小沢　違うのは中学でなく高校の教師ってことくらい。

浜野　岡谷東の名物教師だ。

小沢　二人とも気位が、いや理想が高そうだから……で黒木、どうして別れたんだ？

黒木　いいよ、昔の話は。

小沢　ナイスなカップルだったのに。

浜野　やめてやれよ。

小沢　気にしてないだろ。こうして二十年ぶりに同窓会に顔を出したんだし。

浜野　黒木は東京、綾子は松本。遠距離はうまくいかないものさ。

小沢　そうなの？

黒木　……そうだな。

小沢　何だ、もっとドロドロしたドラマがあったかと思ったのに。つまらんな。

浜野　もう恩讐の彼方さ。みんな、すっかりおじさん、おばさんなんだし。四二歳だぜ。信じられんよ。

黒木　人生の折り返し地点だ。

小沢　どっこい岡崎なんて、おまえらみたい

に悟り澄ましちゃいないぞ。あいつは綾子にべた惚れだった。

浜野　綾子はもてたよ。岡崎だけじゃない。

小沢　実はおまえもか？

浜野　俺は気の強い子は苦手だったから。

小沢（黒木に）どちらかというと綾子の方が積極的だったんじゃないか？

黒木　よそうよ。

小沢　岡崎にとっちゃ、黒木なんて憎んであまりある相手だ。憧れの君とつきあった挙句に、勿体なくもふっちまって。

黒木　そんなことないよ。ふられたのは俺の方だ。

小沢　綾子がこっちへ帰ってきたときチャンスだと思ったんだろうな。

浜野　その頃には岡崎、もう結婚して子供もいただろ。

小沢　そんなの関係ないさ。あいつの情熱の焔はめらめらと燃え上がった。昔は手の届かなかった女が……。

浜野　今だって届かないよ。

小沢　いやいや、今や地元の名士、商工会議所の副会頭様だぞ。たかが漬物屋とはいえ、年商十億を誇る岡崎物産の二代目社長だ。大学出の俺たちの十倍は稼いでる。金があるだけじゃない。市長のおぼえもいい。廃校になった校舎の利用法を検討する委員会の代表だ……まあ、おかげで俺たちもこうやってもぐり込めてるんだが。

浜野　全国行脚の流浪の民のくせに、こっちのことにやけに詳しいな。

小沢　外にいる方が気になるもんだよ。

黒木　小沢、転勤人生だものな。

小沢　今のところで五か所目。

浜野　長崎だっけ。有名なお祭りが……。

小沢　長崎くんち。諏訪神社の祭礼だ。

黒木　諏訪神社なのか……。

小沢　同期はみんな本社に戻ったが、俺はいまだどさ回り。

浜野　地方が嫌じゃないみたいだな。年賀状

を見るかぎり。

小沢　大学の四年間過ごしたが、東京へ戻りたいとは思わない。女房や子供には迷惑かけてるが、俺には地方が性にあってる。新しい土地や人間関係があまりストレスにならん。とはいっても、楽しめるのはせいぜい三年ぐらいだ。四年目になるとうずうずしてくる。何もかもうっとうしくなった五年目に次の赴任地が決まる。

黒木　転任願いを出すの？

小沢　これは家族には内緒だ。本社へ戻してくれと泣きつくやつが多い中で、俺は変人扱いされている。というか、結構重宝がられてる。

浜野　おまえは立派な変人だよ。

黒木　小沢はいいだろうが、子供たちは転校しなきゃならないんだろ。

小沢　長女なんて小学校二回、中学校も一回変わってる。高校ぐらいは卒業までいてやるつもりだが。

黒木　それこそいじめられたりしないか？

小沢　お姉ちゃんは肝っ玉が座ってるというか、動じないタイプだから平気だが、弟の方は女房の話だと学校でいろいろあったみたいだ。

浜野　みたいって、おまえは知らないの？

小沢　あまり頼りにされてない。

浜野　いいかげんなオヤジだから。

黒木　デラシネか。

小沢　どうせ根なし草だ。水面に漂う（笑）

……俺には岡崎みたいなのは信じられん。あいつ、四十二年間、ずっとここだろ。Uターン組の浜野は千葉に二十年いたし、綾子も松本や長野に長いことといた。岡崎は高校も自宅から五分で、卒業してそのまま漬物屋の若旦那だ。

浜野　直子だってずっとここだぜ。

小沢　……あいつ、高校の頃、直子とつきあってたこと知ってるか？

黒木　岡崎が？

小沢　知らなかったろ。地味な二人がつきあっても、誰も興味持たんからな。噂にもならなかった。

浜野　どうして小沢は知ってたんだ？

小沢　やつが話してくれたからさ。聞きもしないのに……「なあ小沢、直子ってブスだけど、すげえおっぱいしてるんだぜ」

黒木　よせよ。

小沢　音楽室まで聞こえないよ。

浜野　そういう関係だったのに結婚しなかったんだな。

小沢　しないよ、なあ（黒木に）。

黒木　知るか。

浜野　都会じゃ火遊びで通るが、田舎じゃそうはいかんぜ。

小沢　まあいろいろあったようだが、いいじゃないか。直子もちゃんと亭主も子供もいることだし。

浜野　でも同窓会によく出て来たな。岡崎が幹事なのに。

小沢　もう関係ないんだよ。女は新しい相手ができれば前の男のことなんてきれいさっぱり。昔の相手の思い出を後生大事にしてるのは男だけだ……なあ（黒木に）。

黒木　知らないって。

小沢　よく来たといえば、綾子、おまえと何年ぶりなんだ？　でも、おまえらだって全然平気だろ。

黒木　……。

小沢　平気じゃないのかな。かたやいまも独身の女、かたやパツ一の男。中年とはいえ並べば絵になるお二人さんだ。

黒木　悪いだろ、あいつに。

小沢　綾子、きれいじゃないか。お世辞抜きに。生活疲れの微塵も無し。岡崎じゃなくたってその気になるよ……でもおまえ、綾子と全然しゃべってないだろ。

黒木　しゃべったよ。少し……。

小沢　何の話を？

黒木　地球温暖化対策の……。

小沢　馬鹿じゃねえの（笑）。子供のいない二人が地球の未来の心配なんかするな。

浜野　黒木、子供いなかったんだよな。

小沢　いれば我慢するさ。

溶暗。

舞台Ｂ面に明り。

直子　静江さん、子供は？

静江　一人、中学生。

直子　女の子？

静江　男の子。

直子　うちも二番目が中学生。うちは女の子だけど、中学生って難しくない？　何考えてるか、わけわからなくって。

岡崎　おまえら。

直子　……あ、ごめん。

綾子　いいのよ、そういうこと気にしなくて。中学生か、私にもそのくらいの子供がいてもいいのよね……十四？

静江　え？

綾子　歳。

静江　ええ、そう。十四歳。

綾子　十四歳か……あの人も十四歳だった。

直子　あの人って？

綾子　あの人。

溶暗。

舞台Ａ面に明り。

小沢　関口がさ。

浜野　何？

小沢　二年生のとき、おかしなことやらせたじゃないか。

浜野　ああ、劇だろ。

黒木　だから演劇コンクールだよ。

小沢　あれにはまいったね。どういういきさつか知らんが、うちのクラスも参加するこ

とになってさ。余計なことやらされる俺たちはいい迷惑だった。

黒木　関口先生書きおろしの脚本で、演出も音楽もすべて。

浜野　タイトルが……。

黒木・小沢（同時に）南の島のオンバシラ。

三人、歌う。『南の島のオンバシラ』のテーマの前半。出だしはスローに。

火炎樹の花咲く小島
ヤシの木陰に風渡り
銃を枕にしばし微睡む
鉄の鳥さえ飛ばなけりゃ
ここは南洋パラダイス
海ゆかば水漬く屍
水平線のかなたより
黒雲がやってくる

溶暗。

舞台B面に明り。

岡崎（静江に）今年はオンバシラだぞ。見に来るんだろ。

静江　どうしようかな。

直子　この前は？

静江　子供、小さかったから。

岡崎　実家があるんだし。ご両親もまだ元気なんだろ……兄貴の嫁さんとそりがあわないとか。

静江　そういうこともないけど。

直子　あまりこっちへ帰らないの？

静江　ええ……。

岡崎　見せてやれよ。毎年あるわけじゃなし。七年に一度だ。

静江　……この前は七年前、そしてこの次は七年後か。七年前はすごく昔の気がするし、七年後なんてすごく先のことみたい。

綾子　あっという間よ。

直子　でも、あれ、正しくは六年に一度よね。申年と寅年にあるわけでしょ。十二年に二度なんだから、つまり六年に一度。

岡崎　いいんだよ。みんな、七年毎っていうじゃないか。

静江　オンバシラって、諏訪の人たちにとって本の栞みたいなものね。人生という一冊の本の……母親におぶわれて見ていた赤ん坊が、次にはかわいい法被を着せてもらい、玩具のオンベをふって木遣りの真似ごと。その次にはオンバシラのあとをついて回り、その次にはもう立派な曳き手……。

岡崎　ここにいればな。

静江　え？

岡崎　小沢も黒木もここにいない。浜野は帰ってきたが、帰って来たばかりでそう大きな顔をされちゃたまらない。あいつらはお客さんなんだ……しょうがないよな、ここを出て行ったんだから。ここを捨てたんだから。

直子　捨てたって……。

岡崎　捨てたとでもいわないと残された者にはおさまりがつかない。でなけりゃ、俺たちがど田舎に置いていかれた哀れなやつになっちまう。負け犬になっちまう。

静江　誰も岡崎君が負け犬だなんて思ってないわ。負け犬どころか大成功してるじゃない。クラスで一番の勝ち組よ。みんな出世頭だって言ってる。

岡崎　親父の会社をちょっと大きくしただけだ。たかが田舎の漬物屋。あいつらだって腹の中じゃ笑ってる。

静江　そんなことない。

岡崎　笑ってるさ……。

直子　うちのじいちゃん、今年のオンバシラまでは生きていたいって言ってたけど、ダメだった。

岡崎　せめて祭りぐらいは、ずっと支えてきた、ずっと守ってきた俺たちのものだって思いたいだろ。

綾子　（笑う）

岡崎　おかしいか。

綾子　おかしい。

静江　……見せてあげようかな、息子に。

直子　息子さん、名前は？

静江　え？

直子　名前。

静江　……和彦。

直子　黒木君と同じ？

静江　私じゃない。義父がつけたの。

綾子　直ちゃんは字が同じかって聞いたのよ。

静江　同じ……かな。

岡崎　今年は俺のところが春宮一之柱の当番だ。だからいつも以上に気合が入ってる。柱に乗せてやるから息子を連れて来いよ。

静江　乗せるって、危ないでしょ。

岡崎　木落しに連れていくわけじゃない。あれは命知らずだけだ。

直子　岡崎君、木落としするの？

岡崎　今度は地区の責任者だからな。前回は警備係なんぞやらされて、遠くから見てるだけだったが。

静江　あれ、毎回怪我人が出るんでしょ？

岡崎　怪我じゃすまない。死者も出る。死者が出るのは木落としと建御柱だ。無理もないさ。木落とし坂なんて呑気な名前がついてるが、傾斜四十五度の断崖だぜ。それを十トンもある丸太にしがみついて百メートルも転げ落ちるんだから、怪我をしない方が奇跡だ。

綾子　男見るなら七年に一度、諏訪の木落とし、坂落し。

静江　直子さん、見たことある？

直子　木落としはないなあ。

綾子　私はあるわ。

静江　綾子さんあるの？

綾子　普通じゃないの。いい歳をした男たちが完全に舞い上がってる。酔ってるの。危ない薬でもやったような顔して。目が完全に座ってる。だってスキーのジャンプ台よ

り急であれよりずっと高い崖よ。てっぺんから下を見れば、奈落の底を覗くようなものだわ……だから恐怖を克服するためにテンション思い切りあげて。そうよ、まともな精神状態で、正気のままであんなことできないわ。宗教的狂騒っていうのかしら。狂気……そう、狂気だわ。とりつかれてる。とりつかれてるの……コントロールのきかない大木になぎ倒されて押し潰されて……あれはもう一種の自殺行為。

岡崎　そこまでいうか。

綾子　キガクルウ。

静江　え？

綾子　木が狂う。気持ちの気でなくて樹木の木。これがほんとのキチガイ（笑）。

直子　綾ちゃん、オンバシラ、嫌いなの？

綾子　大嫌い。

静江　……関口先生が。

直子　先生？

静江　ほら二年生のときに、中止になっちゃたけど。演劇コンクールの。

直子　南の島のオンバシラ！

直子と静江が歌う。『南の島のオンバシラ』のテーマ、後半部分。

うさぎ追いしかの山から
迎えまつれオンバシラ
雷神（いかずち）の依代を
小鮒釣りしかの川越えて
いざ建てんオンバシラ
千年のオベリスク

溶暗。

舞台Ａ面に明り。教室。

小沢　あれ、どうしてやめることになったんだい。

浜野　台本に問題があったってことだろ。関

口先生がほとんど独断で進めて、担任も校長も全然チェックしてなかったんだな。ところが、父兄の中に台本を読んで教育委員会にご注進申し上げたのがいたらしい。

小沢　どこがいけなかったんだ？　戦争中のことをとりあげたことか？　軍国主義、帝国主義への反省もあり、祭りを絡めて戦争の悲惨さを訴えたきわめて教育的な内容だと思ったが。まあ、やや感傷的だったが。

浜野　おそらく、オンバシラの死亡事故のくだりがひっかかったんじゃないか。

黒木　批判的だったもんね。

浜野　教育委員会だけでなく、教職員組合でもこれはまずいだろうということになったらしい。四面楚歌。孤立無援の先生は泣く泣く上演をあきらめたという次第。

小沢　関口、燃えてたよな。ずいぶん練習させられた。夏休みまで学校に呼び出されて。それが突然中止だもの。

黒木　正直気が抜けたよね。でもあの先生が初めて俺たちに頭を下げたんだ。申し訳ないって。だから怒る気にも……。

浜野　難解といえば難解な筋だったな。

黒木　意味のわからないところもずいぶんあった。中学生向きではなかったかも。

小沢　で、学級委員、浜野雄二君の役は？

浜野（敬礼して）牛山太郎少尉。陸軍歩兵第五十連隊所属。牛山家の長男。二五歳……で、エスケープの常習犯、小沢透君は？

小沢（敬礼）牛山次郎二等兵。陸軍歩兵第百五十連隊所属。牛山家の次男、二十歳。並びに復員後の三十四歳も演ずる。

浜野　牛山三郎、十四歳。牛山家の末っ子。旧制諏訪中学二年には黒木和彦君。

小沢　中澤春美、十四歳。三郎の幼馴染、諏訪女学校二年には加藤綾子……綾子なんて二十八歳と四十二歳も演じたんだ。

浜野　少女から中年までだよ。『女の一生』の杉村春子張りに（笑）。

小沢　テニアン島原住民の少年、マルコを武

井直子。旧姓安田直子。直子もマルコが四十二歳のときをやってる。

浜野　山口静江、旧姓河西静江は我ら牛山三兄弟の母親、牛山スミ、四十八歳。

小沢　静江、いきなり老け役だったんだな。

浜野　昔からお母さんって雰囲気があったが……岡崎伸一君は？

小沢　漬物屋の大将は俺、牛山次郎と同郷の陸軍二等兵。有賀宏典、二十歳。

黒木　……ふれられたくなかったんだよ。

浜野　え？

黒木　みんながふれられたくないことに、先生はふれようとした。だから……。

溶暗。

明りが入ると、舞台B面に綾子が一人。オルガンを弾く。

『南の島のオンバシラ』のテーマ曲。弾き終って暗転。

3

『南の島のオンバシラ』の一場面。

昭和十九年、三月。テニアン島。

牛山太郎少尉、二五歳（浜野が演じる）とチャモロ族の少年マルコ、十四歳（直子が演じる）。マルコの日本語はたどたどしい。

マルコ（直子）（両手を広げて）タロー少尉、このくらい？

太郎（浜野）いやいや、そんなものではない。

マルコ（直子）もっと太いの？

太郎（浜野）太いぞ。春宮一之柱など差しわたしが一メートル以上ある。大人二人でも手が回らない太さだ。大和の主砲より太い。

マルコ（直子）ヤマト？

太郎（浜野）我が大日本帝国海軍の連合艦隊

が誇る世界一の戦艦だ。四十六センチ主砲を九門も備えている。

マルコ（直子）タロー少尉は陸軍なのに見たことあるの？

太郎（浜野）ああ。小さな島くらいある海の要塞だ……おい、マルコ、これは軍事機密だぞ。

マルコ（直子）（指を口にあて）秘密。

太郎（浜野）オンバシラ祭りではな、不沈戦艦大和の主砲より太いモミの木を山から伐り出し、神社まで運ぶんだ。

マルコ（直子）神社？　テニアンにも神社がある。

太郎（浜野）あんなもんじゃない。大昔からあるもっともっと立派な神社だ。諏訪大社といってな、いわば神社の大親分。兵隊の位なら大将だ。艦隊なら旗艦だ。

マルコ（直子）神社の大将……。

太郎（浜野）諏訪大社は上社、下社に分かれ、さらに上社には前宮と本宮、下社には春宮、秋宮。全部で四つのお社がある。それで申と寅の年の……。

マルコ（直子）サルとトラ？　サルって、これ？（猿のしぐさをする）

太郎（浜野）干支を教わらなかったか。十二年を一括りにして、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥と、各々に動物をあてはめる。今年、十九年は申の年。オンバシラは申と寅の年にやるんだ。

マルコ（直子）じゃあ、次はいつ？

太郎（浜野）二十五年、二十五年は寅年だ。

マルコ（直子）ずっと先だね。

太郎（浜野）ああ、ずっと先だ。ずっとずーっと先の話だ……申と寅の年の四月から五月にかけて、それぞれに四本、計十六本のオンバシラが山から曳かれ、お社の境内に建てられる。

マルコ（直子）十六本……。

太郎（浜野）オンバシラは何百人もの、人の力だけで曳く。狭い山道を、そして崖を下

り降り、川も越える。屈強な男たちがオンバシラの綱を曳くんだ。こうやってな。（綱を曳くしぐさ）ヨイサ、ヨイサ。

マルコ（**直子**）ヨイサ、ヨイサ。

太郎（**浜野**）諏訪に生まれ育った男の中の男たちが大勢で曳くんだが、これがやすやすと進まない。そりゃそうだ。差しわたし一メートル、長さ十五メートルの丸太だ。優に十トンはある。だからこいつがいったん止まってしまうと、びくともしなくなる。そこで木遣衆の登場だ。

マルコ（**直子**）キヤリ？

太郎（**浜野**）（木遣り、甲高い声で歌う）**心揃えてお願いだあ。**

マルコ（**直子**）何、それ（笑う）。

太郎（**浜野**）（木遣り）**綱渡りだでお願いだあ。**

マルコ（**直子**）オネガイ？

太郎（**浜野**）応援団みたいなもんだな……それで曳いてる男らの気持ちが揃うと、オンバシラは魔法をかけられたように、ずるっずるっと動き出すというしかけだ。

マルコ（**直子**）魔法かあ。

太郎（**浜野**）山奥から四里、五里の道なき道を三日かけて曳き、いったん休ませる。ここまでを山出しというんだ。一か月後、それぞれのお社へ曳き入れる。これが里曳きだ……さてこれからが一番の見せ場、オンバシラを立てる。

マルコ（**直子**）そんな大きな丸太を立てるの？

太郎（**浜野**）そうだ、十五メートルもあるんだぞ。

マルコ（**直子**）クレーンは？

太郎（**浜野**）そんな不粋ものは使わん。人の力だけで建てる。

マルコ（**直子**）すごいな。

太郎（**浜野**）すごいだろ。

マルコ（**直子**）どうして立てるの？

太郎（**浜野**）それは（少し考え）……東西南北、四方から襲ってくる災いから国を守るためさ。いわば守備隊の陣地づくりだな。

マルコ（直子）　ワザワイ？　ワザワイって？
太郎（浜野）　天災や疫病、それから……。
マルコ（直子）　戦争も？
太郎（浜野）　諏訪明神は戦の神様でもある。
マルコ（直子）　イクサのカミサマ？
太郎（浜野）　そうだ。戦争の神様だ。
マルコ（直子）　じゃあ強いんだね。
太郎（浜野）　強いのかな（考え込む）……諏訪大社に祀っているのは建御名方神（タケミナカタノカミ）というんだが、この神様は大国主神（オオクニヌシノカミ）の息子で。
マルコ（直子）　オオクニヌシ、マルコ知ってる。島の学校で日本の先生に教わった。怪我をしたウサギを助けた。
太郎（浜野）　よく知ってるな。建御名方神は大国主の二番目の息子で、出雲の国譲りのときに一人だけ逆らったんだ。で、交渉にきていた建御雷神（タケミカヅチノカミ）と闘ったが、こてんぱんにやられ、這這の体で諏訪まで逃げていったんだ。そして、「もうこの地から出ていかないからどうか許して下さい」って。
マルコ（直子）　何だ、タケミナカタ、弱い。
太郎（浜野）　そうだな（笑）。
マルコ（直子）　タケミカヅチは強いんだね。

飛行機の爆音。上空を米軍の偵察機が通り過ぎる。見上げる二人。

太郎（浜野）　マルコ。
マルコ（直子）　何？
太郎（浜野）　米軍が上陸したら俺の手伝いはいいから、すぐに母さんや妹を連れて山に逃げろ。食べ物や水を持っていけ。洞窟の中でじっとしてるんだ。
マルコ（直子）　アメリカ、上陸する？
太郎（浜野）　ああ、いつかする。必ず。
マルコ（直子）　日本軍は強い。
太郎（浜野）　……。

マルコ（直子）日本陸軍は……。
太郎（浜野）米軍はもっと強い。
マルコ（直子）アメリカ、タケミカヅチ？
太郎（浜野）そうだ。
マルコ（直子）アメリカ、テニアンを譲れって？
太郎（浜野）そういうことだ。
マルコ（直子）日本軍、タケミナカタみたいに逃げるの？
太郎（浜野）日本軍は逃げない。逃げることができない。だが、おまえたちまで巻き添えになることはない。ここはおまえたちの島なんだ。おまえたちの土地なんだ。日本のものでも米国のものでもない……おまえがチャモロとわかれば米軍は何もしないだろう。でもやつらには日本人もチャモロも区別がつかん。
マルコ（直子）……ワタシタチハリッパナニホンジンニナリマス。ワタシタチハテンノウヘイカノセキシデアリマス。ワタシタチハ……。
太郎（浜野）よせっ！
マルコ（直子）（小声で）テンノウヘイカニチュウギヲ……。
太郎（浜野）マルコ、俺にはおまえと同じ十四になる弟がいる。三郎という。三郎は故郷の諏訪にいて母親を守っている。
マルコ（直子）父さん、いない？
太郎（浜野）いない。マルコと一緒だ。俺たちは三人兄弟で二番目の次郎も戦地だ。
マルコ（直子）サブロー、一人？
太郎（浜野）そうだ。だからおまえも母さんや妹たちを守らなきゃいかん。
マルコ（直子）サブロー、オンバシラを曳く？
太郎（浜野）今年のオンバシラには諏訪に若い男がいない。みんな兵隊になっているから……三郎にはオンバシラを頼むぞって手紙に書いてやった。
マルコ（直子）サブロー、強い？
太郎（浜野）小さいときは弱虫の泣き虫だっ

たが。

マルコ（直子）でも、オンバシラを曳く。

太郎（浜野）ああ。

マルコ（直子）オンバシラを建てる。

太郎（浜野）ああ、建てる。

マルコ（直子）サブローがオンバシラを山から曳いて、オヤシロに建てる。

太郎（浜野）ああ、きっとやってくれる。

マルコ（直子）……タロー少尉、カロリナスの住吉神社にもオンバシラ建てればいい。一メートルの太い木は島にないから、かわりに、あそこにある大砲を四門建てる。ヤマトのよりだいぶ細いけど。

太郎（浜野）テニアンでオンバシラか（笑）。だが、あの重い加農砲を神社まで引っ張り上げるのはたいへんだぞ。

マルコ（直子）（木遣りを真似て）ココロソロエテ、オネガイダ。

太郎（浜野）もう覚えたのか（笑）。

マルコ（直子）オンバシラ、見たいな。

太郎（浜野）いつかおまえも日本に来られるような、そんな時代がくるかもしれん。本物のオンバシラが見られるような……。

マルコ（直子）サブローと一緒にオンバシラを曳く。

太郎（浜野）おお、曳かせてやるぞ。

マルコ（直子）ヨイサヨイサ。

太郎（浜野）ヨイサヨイサ。

ヨイサヨイサの掛け声とともにあたりをぐるぐると回る二人。
やがて疲れて座り込む二人。

マルコ（直子）タロー少尉の故郷は寒い？

太郎（浜野）ああ、三月はまだ寒い。雪が積もっているかもしれんなあ。

マルコ（直子）ユキ？

太郎（浜野）ああ、雪だ。

マルコ（直子）ユキって？

暗転。

4

『南の島のオンバシラ』
昭和十九年一月。岡谷市。牛山家。
牛山三郎（黒木が演じる）と中澤春美（綾子が演じる）。ともに十四歳。

春美（綾子） 塩尻まで行ったの？

三郎（黒木） 家を出たのは夜中の二時頃、外は真っ暗だった。懐中電灯持って。

春美（綾子） あそこまで歩いたの？

三郎（黒木） 他に方法がないもの。三時間もかかった。僕は平気だったが、母さんはつらそうだった。

春美（綾子） おばさん、胸が悪いのに。

三郎（黒木） 行こうといったのは母さんだ。

春美（綾子） 次郎さんの列車が通る保証はなかったんでしょ。

三郎（黒木） 次郎兄さんの手紙には、一月二十一日に出発の予定と書いてあった。予定が変わることもあるだろうし。出発時間までは書いてなかった。二等兵の兄さんにはわからないさ。でも母さん、無駄足になるかもしれないけど、とにかく行ってみようって。

春美（綾子） おばさん、次郎さんに会いたかったのね。

三郎（黒木） ああ……。

春美（綾子） その前に松本まで会いに行けばよかったのに。

三郎（黒木） 満州から戻ったばかりで、こんなに早く出発なんて思わなかった。

春美（綾子） それで会えたの？

三郎（黒木） 駅に入るわけにはいかないから踏切の近くの土手で待ってた。吹きっさらしだから寒くて寒くて。

春美（綾子） おばさん、お気の毒。

三郎（黒木） 七時頃、軍用列車が通った。兵隊が大勢乗っていたから、あの中に次郎兄さんがいたのは間違いない。

春美（綾子） 次郎さん、いたの？

三郎（黒木） わからないよ。ほんの一瞬だし……でもすごく長く感じた。母さん、列車に手を合わせて。

春美（綾子） ……。

三郎（黒木） 次郎兄さんの方で、僕らを見つけたかもしれない。

春美（綾子） ……。

三郎（黒木） そんなこと、ないかな。

春美（綾子） あるよ。きっと次郎さん、列車の中から二人を見つけたよ。見送りにきてくれたって喜んでるよ。

三郎（黒木） 母さん、そう思ってるかな。

春美（綾子） おばさんの気持ちが伝わらないはずない。

三郎（黒木） うん。

春美（綾子） 親子だもの。

三郎（黒木） ……帰りは四時間ちょっとかかった（笑）。

春美（綾子） 次郎さん、今度はどこへ行くの？書いてあったんでしょ？

三郎（黒木） そんな軍事機密書けないよ。でも南洋なのは間違いない。サイパンかニューギニアか。

春美（綾子） どうしてわかるの？

三郎（黒木） 次郎兄さんは諏訪中の天文気象部にいただろ。だから星座には詳しい。手紙の裏に点が打ってあってね。鉛筆でそれを結んだら。

春美（綾子） 星座になった。

三郎（黒木） そう。それもここではお目にかかれない。緯度のずっと低いところの星座。（小声で）南十字もあった。

春美（綾子） 南十字か。

三郎（黒木） つまり南十字星の見えるところへ行くってことさ。

春美（綾子） 南方はたいへんだって。輸送船

が潜水艦の魚雷にやられるんだって。ずいぶん沈められたって。

三郎（黒木） 次郎兄さん、泳ぎは達者だからな。でも暑いのは苦手だ。百五十連隊は松本連隊の所属だったから信州の出身者が多いんだ。寒いのには慣れてるから、冬の満州でも平気だったようだけど……海となじみのない兵隊が南の島なんておかしいよね。

春美（綾子） 太郎さんはどうされてるのかしら。

三郎（黒木） 心配なのか？

春美（綾子） 心配なのかって……三郎は心配じゃないの？

三郎（黒木） 三郎って呼びつけにするな。もう子供じゃないんだから。だいたい同い年じゃないか。

春美（綾子） 私の方が早く生まれた。

三郎（黒木） 姉さんぶるなよ。それとも太郎兄さんの嫁になって、ほんとに姉さんになりたいのか？

春美（綾子） 何、馬鹿なこと言ってるのよ！太郎さん、私みたいな子供のこと。

三郎（黒木） 本気にするな（笑）。

春美（綾子） 太郎さんも満州なんでしょ。

三郎（黒木） ああ、暮に手紙が来た。五十連隊も近く移りそうだと書いてあった。太郎兄さんは将校だからわかってるかもしれないが、どこかは機密なんだろう。

春美（綾子） 内地へ帰ってくるかも。

三郎（黒木） それはないよ。次郎兄さんと同じで、戦況が芳しくない南方だろう。

春美（綾子） ……。

三郎（黒木） 二人ともオンバシラのことばかり心配してるんだ。今年はちゃんとやれるかって。

春美（綾子） 諏訪の男だものね。

三郎（黒木） ほんとなら二人とも祭の中心になって。

春美（綾子） 悔しいでしょうね。

三郎（黒木） 出征してる諏訪の男たちみんな悔しがってる。

春美（綾子） きっと戦地でもオンバシラのことばかり考えているわ。

三郎（黒木） ああ。

春美（綾子） 若い衆がいないから三郎たちも手伝うんでしょ。

三郎（黒木） うん、学徒動員だ（笑）。普通なら半人前は参加させてもらえないけど、非常時だから特別に……兄さんたちもおまえらが頑張れって。

春美（綾子） 中止の話もあったんでしょ。

三郎（黒木） 千年以上も続いてる祭を途絶えさせるわけにはいかん。

春美（綾子） オンバシラって千年なの？

三郎（黒木） 知らなかったのか。桓武天皇の御代の記録があるから少なくも千二百年にはなる。原型は縄文時代からという説もあるんだ。あの戦国時代にさえ続けられたというとんでもない祭だぞ。

春美（綾子） 何よ、どうせ太郎さんの受売りでしょ。

三郎（黒木） オンバシラは祭の中の祭だ。日本一だ。やめたら御先祖様に申し訳ない。

春美（綾子） 大袈裟。

三郎（黒木） 大袈裟じゃない。春ちゃんは親の代からだからわからんかも知れんが、うちは代々諏訪大社の氏子だ。

春美（綾子） おじさんが生きていらっしゃれば……。

三郎（黒木） 父さんは普段はもの静かだったのに、オンバシラとなると人が変わった。兄さんたちもその血を引いてるんだよ。

春美（綾子） 次のオンバシラには、兄さんたちも曳けるようになるかしら。

三郎（黒木） なるさ。

春美（綾子） なるといいけど。

三郎（黒木） 次は二十五年だぞ。

春美（綾子） 戦争が終わってなかったら？

三郎（黒木） 終わるよ。だって……。

春美（綾子）だって？
三郎（黒木）だって、そうだろ。オンバシラを二度もなんて……そんなのってない。
春美（綾子）……うん。
三郎（黒木）終わってるよ。
春美（綾子）でも、どうしてオンバシラは男だけなのかしら。
三郎（黒木）女衆も手伝ってるじゃないか。
春美（綾子）曳きたいの、オンバシラの綱を。木落とし坂をオンバシラにつかまって滑り降りたい。私、できるわよ。結構力あるし。腕相撲だって三郎なんかに負けない。運動神経だって私の方がいいし。女にもやらせるべきだわ。
三郎（黒木）女はダメだ。昔から決まってるんだ。
春美（綾子）どうして？
三郎（黒木）それは……。
春美（綾子）女は穢れてるから？
三郎（黒木）……そうだ。
春美（綾子）毎月のあれがあるから？
三郎（黒木）知らん。
春美（綾子）私、もう子供だって生める。
三郎（黒木）馬鹿。
春美（綾子）どうせ馬鹿よ。
三郎（黒木）神様が嫌がる。
春美（綾子）神様がそう言ったの？
三郎（黒木）そうなんだろ。
春美（綾子）日本の神様で一番偉いのは誰？天照大神（アマテラスオオミカミ）じゃないの？　アマテラス様は女の神様よ。女の神様が一番偉いのよ。なのに女が穢れてるだなんて、それじゃアマテラス様を侮辱してるのと同じだわ。
三郎（黒木）天照大神と一緒にするな。
春美（綾子）同じ女だわ。
三郎（黒木）あっちは神様だぞ。畏れ多いやつだな。
春美（綾子）アマテラス様を引っ張り出さなくても、下社の祭神は八坂刀売神（ヤサカト

メノカミ）よ。建御名方神（タケミナカタノカミ）の奥さんだわ。女神様よ。若い男衆がいないんだから、この際、国防婦人会に任せるべきだ。

三郎（**黒木**）何言ってんだ。

春美（**綾子**）心配してるの、三郎のこと。

三郎（**黒木**）……大丈夫だから。

春美（**綾子**）ほんとうに大丈夫？

三郎（**黒木**）大丈夫。

春美（**綾子**）……じゃあ、特別に私がお守りをあげる。

三郎（**黒木**）お守り？

春美（**綾子**）（小声で）兵隊さんにあげる弾よけのお守り。

三郎（**黒木**）何だよ、それ？

春美（**綾子**）いいからいいから。でもこのこと、誰にも言っちゃあダメよ。おばさんにも内緒。

三郎（**黒木**）母さんにも？

春美（**綾子**）絶対に。

暗転。

5

『南の島のオンバシラ』

昭和十九年、八月。西太平洋トラック諸島、春島の野戦病院。

牛山次郎二等兵（小沢が演じる）と同郷の有賀宏典二等兵（岡崎が演じる）。負傷した有賀はうつぶせの姿勢。ともに二十歳。

次郎（**小沢**）有賀、痛むか？

有賀（**岡崎**）ちょっとな。

次郎（**小沢**）その格好じゃないと寝れないのか？

有賀（**岡崎**）グラマンに尻の肉をそがれたからな。

次郎（小沢）　でも尻でよかったじゃないか。腹なら今頃生きていないぞ。

有賀（岡崎）　今日も一日穴掘りか？

次郎（小沢）　ああ、もぐらみたいなもんだ。弾薬庫だというが、隠すほどの弾薬なんてない。大体、ここへ来てから俺はただの一度も銃を撃ったことがない。米軍の上陸に備えるというが、やっこさんたちにそんな気配すらないぞ。

有賀（岡崎）　いつかくるだろ。

次郎（小沢）　どうかな……ここにはもう航空隊もなければ連合艦隊もいない。

有賀（岡崎）　飛行機はみんなぶっ壊されたし、連合艦隊はトンズラだ。

次郎（小沢）　島にいるのは反撃するだけの武器もなく、腹をすかした兵隊だけ。

有賀（岡崎）　俺たちが日本から運んできた武器も食糧もみんな海の底だもんなあ。

次郎（小沢）　米軍にとってここはもう戦略的に重要ではないんだ。そんなところへ無理して上陸することはないんだろ。

有賀（岡崎）　でも毎日偵察機が飛んでくるじゃないか。

次郎（小沢）　偵察ぐらいするさ。偵察がてらに機銃掃射でいたぶって。遊んでるんだよ。敵は余裕があるんだ。ここで爆撃の訓練をさせているという話もある。

有賀（岡崎）　馬鹿にしやがって。どうして撃ち落とさないんだ。

次郎（小沢）　俺たちがここへ来た時、見ただろ。丸太の大砲を。冗談かと思ったぜ。向こうにはちゃんとお見通しだ。騙せやしない。ほんものの高射砲もあるが、あんなのを撃ったら、たちまち位置がばれて倍返しの爆弾の雨あられだ。

有賀（岡崎）　横穴を掘って隠せばいい。

次郎（小沢）　おまえはやつらの爆弾の威力を知らんから。おかげで俺たちはえらく深いとこまで掘らなきゃならん。そして夜にはいもを掘る（笑）。

有賀（**岡崎**）夜なのか。

次郎（**小沢**）暗いから敵機に狙われない。とにかく食料を按配しないことには飢え死にだ……おい、腹減ってないか？

有賀（**岡崎**）動かんからそう腹も減らん。

次郎（**小沢**）そうか。

有賀（**岡崎**）すまんな、何もできなくて。

次郎（**小沢**）気にするな。生きていてくれればいい。同郷の者がいなくなると寂しいからな。上浜の林伍長も小口の宮坂上等兵も、宮川の笠原、富士見の中山、中洲の平出、うちの中隊にいた諏訪出身者はみんな死んじまった。

有賀（**岡崎**）衛生兵の藤森浩一も先月やられた。あいつは下諏訪だ。

次郎（**小沢**）藤森の兄貴はうちの兄貴と諏訪中の同期だった。

有賀（**岡崎**）牛山少尉殿はどうしてる。

次郎（**小沢**）五十連隊も満州にいたが、おそらくもういないだろう。俺たちより先に南方に来ているかもしれない。

有賀（**岡崎**）どこだろうな。

次郎（**小沢**）わからん。

有賀（**岡崎**）サイパンじゃないといいが。

次郎（**小沢**）サイパン？

有賀（**岡崎**）サイパンのあたりがひどくやられたらしい。グアムやテニアンも。

次郎（**小沢**）マリアナ諸島か。

有賀（**岡崎**）ここからサイパン奪還の部隊を出すという話もあったようだ。

次郎（**小沢**）ここから？

有賀（**岡崎**）連隊本部で検討したらしい。

次郎（**小沢**）馬鹿か！

有賀（**岡崎**）大きな声出すな。

次郎（**小沢**）どうやってサイパンまで行くんだ。船がどこにある？　ダイハツで行くのか？　たどりつくとでも思ってるのか？　鬼が島に向かう桃太郎御一行じゃあるまいし。大体、誰が行くんだ？　栄養失調でふらふらの兵隊が攻めてきたってアメリ

カは相手にしてくれんよ。

有賀（岡崎） どっちにしろ、俺は行けそうもないが。

次郎（小沢） 俺だってごめんだ。

有賀（岡崎） ……なあ、牛山。

次郎（小沢） 何だ？

有賀（岡崎） すっかり忘れてたが、今年はオンバシラだったんだよな。

次郎（小沢） そうだよ、オンバシラだ。

有賀（岡崎） オンバシラか。

次郎（小沢） 今年は申年だぞ。忘れてたのか。諏訪の男のくせに。俺なんてオンバシラの夢ばかりみる。

有賀（岡崎） やったかな。

次郎（小沢） やったさ。

有賀（岡崎） 誰に聞いた？

次郎（小沢） 聞くわけないだろ。俺たちがトラックへ来たのは三月だぞ。

有賀（岡崎） でも若いのはみな戦地だ。年寄りだけでやれるか？

次郎（小沢） やれるよ。じいさんたちは結構頑丈だ。年季が入ってるしな。

有賀（岡崎） 足腰が痛くなってオンバシラが立ち往生しちまうんじゃないかい。

次郎（小沢） あわてずのんびりやるさ。

有賀（岡崎） 非常時だからこの際若い娘たちに曳かせるというのはどうだ。腕っ節で男に負けてないのも大勢いるぞ。

次郎（小沢） そりゃあちょっと無理だが、うちの弟も動員されただろうな。

有賀（岡崎） 幾つだ？

次郎（小沢） 十四。

有賀（岡崎） 子供には危なくないか。

次郎（小沢） 大丈夫だ。木落としなんぞよせばいい。

有賀（岡崎） 馬鹿いえ。あれがなければオンバシラじゃない。

次郎（小沢） えらそうにいうな。木落としなんてやったこともないくせに。

有賀（岡崎） おまえだって。

次郎（小沢） そりゃそうだが。

有賀（岡崎） この前のオンバシラは、俺たちまだ十四だった。オンバシラに近寄らせてももらえなかったじゃないか。

次郎（小沢） やっと一丁前の曳き手として召集されると思ったら、別の祭りに召集されちまったもんな（笑）。

有賀（岡崎） 親父さんも元気だったんだろ。前のときには。

次郎（小沢） ああ、オンバシラの翌年にチフスで死んだ。

有賀（岡崎） 木遣りの名人だった。

次郎（小沢） うん、いい声だった。俺も大人になったらって……（木遣り、甲高く）**ヤレー、奥山の大木、里に下りて神となる、ヨーイサ。**

有賀（岡崎） おい、怒られるぞ。

次郎（小沢） 構うものか。誰ももう上のいうことなど聞かん。この島では魚採りが上手なやつと百姓出身者が偉いんだ。飯のタネをつくれるやつが大きな顔していい。威張るしか能の無い上官なんてどいつもくたばっちまえばいいんだ。

有賀（岡崎） 噂だけど、下のものにやられちまったのがいるんだろ。

次郎（小沢） 新京丸に乗っていた将校だろ。船が沈没したとき自分だけ筏を占領して、つかまろうとした連中を海に蹴落としたっていう外道だ。ひどく恨まれていたからな。上陸後、知らぬ間に消えちまったそうだ。

有賀（岡崎） 消されたのか？

次郎（小沢） さあな。どうでもいい。

有賀（岡崎） ……オンバシラか。

次郎（小沢） まだ言ってるのか。きっと無事にすんだよ。

有賀（岡崎） 次のオンバシラ、俺たち諏訪にいるかなあ。

次郎（小沢） せっかくここまで生き延びたんだ。生きて帰ろうぜ。

有賀（岡崎） 帰れるか？

次郎（小沢） 帰れるよ。

有賀（岡崎） おまえは大丈夫だ。

次郎（小沢） ……そうだ。おい、ここでオンバシラをやろうか。

有賀（岡崎） ええっ！

次郎（小沢） 第一大隊や第二大隊にも諏訪の出身者はいる。それで足りなきゃ、伊那でも松本でもいい。この際、信州人を総動員して。

有賀（岡崎） 何、馬鹿なこと言ってんだ。

次郎（小沢） あの丸太の大砲を曳けばいい。くその役にも立っちゃいないんだし。

有賀（岡崎） そんなものずるずる曳いてたら、たちまちグラマンに狙われる。

次郎（小沢） 綱は木の皮を編むか……バナナの葉っぱを刻んでオンベをつくって。

有賀（岡崎） 誰がそんな話にのるものか。

次郎（小沢） 諏訪の男なら必ずのる。オンバシラはもとより命がけだ。海で溺れ死ぬよりも、爆弾でふっ飛ばされるよりも、飢え死にするよりも祭りで死ぬのが本望だ。

有賀（岡崎） あきれたやつだ。

次郎（小沢） ……あきれてるよ。こんな戦にはほとほと。

有賀（岡崎） ……。

次郎（小沢） あきれたもんだ。

有賀（岡崎） 牛山。

次郎（小沢） 犬死にだ。

有賀（岡崎） ……。

次郎（小沢） みんな犬死にじゃないか。

有賀（岡崎） ……牛山、俺はこんなだが、何か手伝えるか？

次郎（小沢） え？

有賀（岡崎） 綱を編むぐらいできるかもしれないな。

次郎（小沢） 有賀……。

有賀（岡崎） オンバシラ、やろう。

次郎（小沢） ああ。

有賀（岡崎） ここは春島というんだろ。つま

り春宮だ。ここは下社の春宮だ。

次郎（小沢）有賀、おまえ、動けないならオンバシラに乗せてやる。

有賀（岡崎）無理だよ。

次郎（小沢）背負ってってやるよ。

有賀（岡崎）悪いよ。

次郎（小沢）遠慮する柄か（笑）。

有賀（岡崎）……俺はたぶん次のオンバシラを見ることはないだろう。だからここでオンバシラの真似ごとをして、それを冥土への土産話にするよ。先に逝った笠原や宮坂上等兵に聞かせてやるんだ。俺たち、春島でオンバシラをやったぞって。

次郎（小沢）有賀……。

有賀（岡崎）丸太の大砲を諏訪のみんなで曳いて、それを神社にぶったてたって。アメリカもあきれていたって。日本兵はついに狂ったらしいと噂していたって。

次郎（小沢）案外、日本軍起死回生の新兵器かと疑うかもしれんぞ。

有賀（岡崎）そうさ、オンバシラは神兵器だ。新しいんじゃなくて古代から伝わる神様の兵器だ。諏訪大明神の霊威をアーメン野郎共に見せてやれ！

次郎（小沢）（木遣り）**奥山の大木、里に下りて神となる**

有賀（岡崎）（木遣り）**心揃えてお願いだあ**

二人（声を揃えて）**オンバシラだでお願いだあ**

暗転。

6

舞台B面。音楽室。

直子 変わらないね。

静江 え？

直子 みんな。小沢君も浜野君も。

静江　歳、とったわよ。
直子　変わらないわ。二十年ぶりだっていうのに。
静江　綾子さんや岡崎君なんかとたまには会うんでしょ。
直子　ううん、全然。
静江　みんな、忙しいのね。
直子　ねえ、静江さん。
静江　何？
直子　黒木君。
静江　黒木君？
直子　あいかわらずかっこいいね。
静江　おじさんになっちゃったわよ。
直子　バツ一なんでしょ。独身のせいかな。綾ちゃんもきれいだし。
静江　私たちは所帯やつれ（笑）。
直子　あの二人、ひさしぶりなのかしら。
静江　さあ……。
直子　お似合いのカップルだったのにね。高校生の頃、本屋さんに二人でいるのをよく見かけた。美男美女で頭がよくて。うらやましかった。大学へ行ってからダメになっちゃったの？
静江　よく知らないけど。
直子　私ね、中学のとき黒木君のことすっごく好きだった。まあ、クラスの女子のほとんどがそうだったけど。でも綾ちゃんがいたから、自分なんか絶対に相手にされないって……静江さんは？
静江　え？
直子　静江さんは黒木君のこと。
静江　私、あんまりそういうの。
直子　そうよね、静江さん、真面目だったから。でも東京組なんだから、向こうで会ったりしなかったの？
静江　一度か二度……。
直子　私も東京に行きたかった。そうすれば黒木君とチャンスがあったかも。
静江　そうね。
直子　冗談。うちなんて弟が二人もいるし。

大学出してくれる余裕なんてなかったし。だいたい頭、よくないし。ブスだし。

静江　立派なお母さんやってるじゃない。

直子　全然立派じゃない。ぐうたら亭主と反抗期の子供の相手でグタグタ。

静江　どこも一緒よ。

直子　静江さんの旦那さんってどんな人？

静江　普通よ。普通のサラリーマン。

直子　やさしい？

静江　文句を言われたこともないし、怒ったこともない。

直子　いいじゃない。そういうのが一番。

静江　そうかな……。

直子　ねえ、静江さん。

静江　何？

直子　私、高校のとき岡崎君とつきあってたこと、知ってた？

静江　そうなの。

直子　噂にもならないか、私たちじゃ。

静江　私、そういうの疎いから。

直子　つきあってたというか、はっきりいって体だけの関係。セックスの相手。あの頃の男の子って、頭の中はそのことばっかりでしょ。要するに、やらせてくれる相手なら誰でもいいってやつ。

静江　直子さん。

直子　わかってたけど、もしかしてって……だから、赤ちゃんでもできればいいと思って、避妊もしなかった。

静江　……できたの？

直子　ううん（笑）。私、子供いるし。岡崎君もいるでしょ。だから二人とも不妊症ってことはなかったわけで。まあ、運がよかったというべきか悪かったというべきか……子供ができたらさすがに向こうもどうにかしてくれるでしょ。そしたら今頃私、漬物屋の社長夫人？（笑）。

静江　……。

直子　でもわからないわね。岡崎君の奥さん、ずいぶん派手な人だって評判だから。実は

岡崎君以外の……。

静江　直子さん。

直子　ごめん。静江さんだから……こんなこと誰にも言うわけじゃない。

静江　岡崎君と顔合わせても平気？

直子　平気平気。遠慮することなんてないでしょ。私は遊ばれて捨てられただけなんだから。向こうが気を使うべきなのよ。まあ、そんな人じゃないけどね。気がつかなかった？　私が岡崎君って君づけで呼ぶと、すっごい顔して睨むわよ。

静江　そう……。

直子　黒木君と綾ちゃんの関係とは全然違うの。きっと二人のは、青春時代の美しい思い出ってやつなんだろうけど。

静江　そうね。

直子　やり直せばいいのに。

静江　え？

直子　あの二人。独身なんだし……そうはいかないか。いろいろ難しいんだろうね、頭のいい人たちって。

静江　……。

直子　関口先生なんだけど。

静江　先生？

直子　実はね、この間、病院へ行ってきたの。綾ちゃんああ言ってたけど、私のこと覚えててくださって。「マルコをやった直子さんね」って。うれしかった……でも先生ったら黒木君のことばかり聞くの。知らなかったから答えようがなかったけど、よっぽど黒木君のことが気にいってたのね。

静江　人気者ね。クラスの女子から先生まで（笑）。

直子　先生ったらときどき、黒木君と牛山三郎がごっちゃになるの。やっぱりボケが進んでたのかしら。それと、浜野君なんかの話は出るのに綾ちゃんのことには一言もふれないの。

静江　それはおかしいわね。

直子　看護婦さんに聞いたんだけど、綾ちゃ

ん、入院以来頻繁に顔を出していたみたい。それが先月くらいから。

静江　来なくなった？

直子　看護婦さん、こんなことも言ってた。「あの方たち親子じゃないんですか」って。

静江　似てる？

直子　だって親戚なんだから。

静江　そりゃそうだけど。

溶暗。

明り、舞台Ａ面。教室。

黒木　おふくろさん、どう？

浜野　ボケちゃいないが膝がダメだし、耳元で大声出さないと聞こえないし。糖尿もあるしな。要介護３だ。

黒木　仕事は？

浜野　叔父の工務店の設計、手伝ってる。打ち合せがあるが、ほとんど家で作業できるし。何せ本業はヘルパーだから（笑）。

黒木　バリバリの建築屋だったのにな。

浜野　こっちはのんびりペースだからいいよ。仕事に追われる感じがなくて。

黒木　おふくろさん、千葉へ呼び寄せるわけにはいかなかったの？

浜野　死んでもここを離れないって（笑）。そりゃ無理さ。あの歳になって、知りあいが誰もいないところへなんて行きたくない……女房ともあわないしな。あいつ、オンバシラなんて来たことないんだぜ。子供は一度連れて来たけど。

黒木　じゃあ、奥さんたちがこっちへ住むなんてことは。

浜野　考えられん……施設じゃかわいそうだろ。親父が死んでずっと一人だったし……黒木のお母さんも早かったよな。

黒木　五年前。東京で一緒に暮らしてたんだけど。

浜野　おまえ、嫁さんと別れたのはお母さんとの同居のせいか？

黒木　ストレスはあったかもしれないな。でも別れたのは二年前だし。

浜野　うちも離婚と変わらない。金は送ってるが何とも言ってこない。ああ、遅れたときに一度電話があったな。それも子供にかけさせてさ。養育費払ってる気分だ。

黒木　俺、子供いなかったから。

浜野　再婚しないのか？

黒木　まさか。

浜野　綾子、どうだ？

黒木　浜野まで何言ってるんだよ。

浜野　まだまだ魅力的だよ。それともっと若い娘がいいのか。一回り以上離れた。

黒木　そんな野望はない。

浜野　小沢じゃないが、ナイスカップルだったのに。どうして別れたんだ？（笑）。

黒木　そりゃまあ、いろいろだよ。

浜野　今年のオンバシラには来いよ。

黒木　何だよ、いきなり。

浜野　うちに泊めてやる。おふくろ、おまえに会いたがってたし。喜ぶよ。

黒木　高校時代、よく遊びにいったのにな。

浜野　で、ここだけの話、どうして同窓会に出る気になったんだ？

黒木　……『死ぬときに後悔すること』なんて本が流行ったろ。その中に〝故郷に帰らなかったこと〟〝会いたい人に会っておかなかったこと〟ってのがあったんだ。

浜野　おまえ、癌じゃないだろうな。

黒木　どこかに悪いところの一つや二つあるかもしれないが、いまのところ大丈夫だ。でも最近、同じくらいの友人や同僚が亡くなって……まあ、そういうことも考える年齢になったってことだ。

浜野　俺は、本当はずっと前からここに帰りたかったんじゃないかって思うときがある。介護Ｕターンってことになってるが、家族をおいてまですることなのか……何か別の方法もあったんだよ。そうでなくて、俺はここに帰りたかったんじゃないか。帰

る理由を、帰るきっかけをさがしてたんじゃないかって。

黒木　じゃあ、この先、おふくろさんが亡くなっても。

浜野　千葉へは帰らない。おそらく。

黒木　なぜ……。

浜野　よくわからん。でも帰らんと思う。小沢のやつ、放浪人生だとか、かっこつけたことといって、親の世話に戻った俺のことなんて馬鹿にしてるが。

黒木　そんなことないって。

浜野　誰よりもここにこだわってるのは小沢だ。あいつにとって東京はゴールじゃない。あいつは憧れの人を遠くから見守るみたいに、女々しく故郷を偲んでやがる。いろんなところへ行けば、そこにはいろんな祭りがあるって、そう言ってたろ。でもその祭りは所詮、来たり者が関われるものじゃない……「祭りの中で人は生きている」、そんな詩の一節があったが、その祭りを、生きるための祭りを小沢もおまえも失くしたんだ。いや、捨てたのかな。俺だって、まだ取り戻せてはいない。

黒木　祭りの中で人は生きている……。

浜野　七年毎に巡ってくるオンバシラは人生の標なんだ。千年にわたって繰り返し繰り返し、刻まれ続けた物差し。諏訪の人間は先祖代々、オンバシラの中で生きてきたんだ。そこから外れた者が、それを忘れようとした者が、糸の切れた凧かもやいを解かれた舟みたいに、だだっ広い空や海で迷ってしまうのは無理もない。

黒木　……。

浜野　デラシネって。

黒木　……。

浜野　故郷喪失者のことだ。

黒木　……清陵の卒業生の半分もこの町には残っていないじゃないか。

浜野　岡崎にいわせると頭のいいやつらは、気のきいたやつらは残らない。家業を継ぐ

か、家のしがらみがあるか、あるいは都会になじめなかった者だけが残る。

黒木　ここに限った話じゃない。

浜野　日本全国、どこでも同じだ。でもみんな、誰もが故郷のことを、祭りのことを考えずにはいられない。考えながら死んでいくんだ。祭りの中で生きられなかったことを悔やみながら。あの兵士たちのように。

黒木　小沢は牛山次郎？

浜野　牛山次郎か、そうかもな……なあ、黒木、俺は綾子の演じた中澤春美は関口先生のことじゃないかと思ってる。

黒木　春美が関口先生？

浜野　昭和十九年当時、先生は十四歳。それに先生の名は春子、春ちゃんだ。

黒木　実話だっていうのか？　先生の創作じゃないのか？

浜野　中澤春美はいないが、牛山太郎、次郎、三郎の三兄弟は実在したんだよ。

黒木　……。

浜野　今井に住んでたらしい。家はもうないそうだが。ひょっとして、それが上演中止の理由かも知れない。おまえの言った、ふれられたくないことかもな。

黒木　牛山少尉のテニアンの話も本当なのか？　あれは先生が島の少年だった人に聞いた話だというのか？

浜野　もしかすると次郎にも。

黒木　……。

浜野　黒木がなぜ三郎の役を与えられたのか。それはおまえが母親と二人暮らしだったからじゃないのか。幼馴染の三郎と同じだったからじゃないのか。

黒木　それで三郎はどうなったんだ？

浜野　三郎は……。

暗転。

7

『南の島のオンバシラ』
昭和二十年十一月。岡谷市。牛山家。
牛山兄弟の母、牛山スミ、四八歳（静江が演じる）と中澤春美（綾子）。スミは小さな木箱を持っている。

春美（**綾子**）おばさん。
スミ（**静江**）春ちゃん……これ。
春美（**綾子**）……。
スミ（**静江**）太郎なの。
春美（**綾子**）ああ（嗚咽）……。
スミ（**静江**）何にも入ってないの。何にも。せめて浜辺の砂ぐらい入れてくれればいいのにね。空っぽなの。紙きれが入ってるけど、そんなもの見たくない。
春美（**綾子**）おばさん。
スミ（**静江**）春ちゃん、私ね、お父さんが死んでからずっと一人で頑張ってきた。あの子たち、立派にすることだけを生きがいに。あの子たちを支えに生きてきたの。なのにどうして？　神様はむごいねえ……末っ子を奪っただけでは足らずに。
春美（**綾子**）おばさん。
スミ（**静江**）太郎の骨の、骨のひとかけらも返してくれないんだから。
春美（**綾子**）……。
スミ（**静江**）三郎はまだお墓にいるだけまし。お墓に行けば会うことができるもの。でも、こんなもの、こんなものじゃお墓に入れてあげることも……。

木箱を地面に投げつけるスミ。それを拾う春美。

スミ（**静江**）ごめんね、春ちゃん。ごめんなさい……春ちゃん、小さい頃、太郎のお嫁さんになるっていってくれたよね。太郎はいつもにこにこして聞いてた。すると次郎と三郎が口とがらせて、春ちゃんは俺がも

らうんだって（笑）。

春美（**綾子**）……。

スミ（**静江**）太郎、お嫁さんももらわないで死んじゃった。可哀相なことをしたわ……ああ、でも残されたお嫁さんはもっと気の毒……日本中に残されたお嫁さんが大勢いるんだろうね。何万も、何十万も、もっとかしら……そんな思いをさせなくてよかった。母親だけが、母親だけが悲しめばいいんだから。

春美（**綾子**）おばさん。

スミ（**静江**）ごめんね、春ちゃん……三郎、亡くなるときまでずっと、兄さんたちのこと心配してたの。兄さんたちは生きて帰ってほしいって。兄さんたちにすまないって。母さんを守れなくてすまないって。そればっかり。

春美（**綾子**）……。

スミ（**静江**）そんなやさしい子を、どうして神様は奪っていくのかしら。兄さんたちがいないから、兄さんたちのかわりにオンバシラを曳いた子をどうして。

春美（**綾子**）オンバシラなんてやめればよかったんです。年寄りと子供だけでなんて、はじめから無理だったんです。無理したからあんなことになった。三郎は木落とし坂でオンバシラに巻き込まれたんじゃない。山道でオンバシラが急に跳ねて……いつもの男衆だったら、太郎さんや次郎さんだったら、あんな事故絶対起きない。

スミ（**静江**）オンバシラで怪我をする人は大勢いる。亡くなる人もいるわ。でも三郎のような子供が、まだ十四の子供が死んだなんて、聞いたことなかった。

春美（**綾子**）……。

スミ（**静江**）そう思ってた。

春美（**綾子**）え？

スミ（**静江**）あったの。大昔にはあったの。お祭りのとき生贄にされる子供がいたの。流れ者の、乞食の子が買われて殺されたの。

ひそかに……。

春美（綾子）おばさん。

スミ（静江）三郎は生贄なの。

春美（綾子）違う！

スミ（静江）……神様はむごいことをする。三人も息子を授けておいて。三人とも自慢の息子だった。それを一遍に三人とも召し上げる。しっかり者の総領を、やんちゃな次男を、やさしい末っ子を……哀れなやもめの宝をひとつ残らず取り上げなさった。

春美（綾子）次郎さんは……。

スミ（静江）トラック島で生き残った人たちはもう帰って来た。なのに今だに連絡がないわ……あの子が島にたどりついたかどうかも確かじゃない。船が沈没して諏訪の人たちも大勢海で死んだの。

春美（綾子）次郎さん、泳ぎは得意だった。夏になると諏訪湖で泳いでいたもの。それに海の方が体が浮くから。次郎さん、絶対死なない。上官が突撃って命令したって、死んでこいっていったって、そんなのに従う人じゃないわ。「冗談じゃないぞ、俺はみすみす弾に当たりにいくのはまっぴらだ。そんなに死にたきゃあんたが行け」って。二等兵でもそのぐらい平気で言える人だもの。喧嘩が上手な人だもの。負ける喧嘩をするわけない。

スミ（静江）……太郎は突っ込んだんでしょうね。あの子は将校だから。逃げたりできない子だから。きっと一番先に。

春美（綾子）……。

スミ（静江）玉砕……散華……字面を見れば美しいけれど。砕けた玉も散った華も美しくなんてない……太郎、痛かっただろうね。苦しかっただろうね。

春美（綾子）おばさん。おばさん、信じて。私の言うこと信じて。次郎さんはきっと生きてる。

スミ（静江）春ちゃん、いいの。もういいの。次郎はいつも「俺はお国のために死ぬのな

んてごめんだ」って言ってた。でもね、あの子のいた島ではたくさんの兵隊さんが飢えやマラリヤで死んだの。たとえ鉄砲の弾に当たらなくたって。

春美（**綾子**）おばさん……。

スミ（**静江**）ありがとう。春ちゃんだけ……戦争中は英霊のなんのってもてはやしても、日本が負けたら、海の向こうで骨になった兵隊のことなんて家族以外気にもかけない。もう誰も……。

春美（**綾子**）そんなこと……。

スミ（**静江**）三郎がね……「母さん、次郎兄さんはきっと南の島で天体観測をしているよ。日本では見られない星座が見られるって喜んでいるはずさ。りゅうこつ座にカメレオン座、コンパス座にみずへび座。それから南十字。いいなあ。次郎兄さんが帰ってきたらきっと言うよ。三郎、おまえにも見せてやりたかったって」。

春美（**綾子**）……。

スミ（**静江**）春ちゃん、太郎の魂も次郎の魂も天に昇って、南の島の夜空にいるんだろうね。三郎の魂も兄さんたちのそばへ飛んで行ったかもしれない。きっと兄弟仲よく空の上で……。

春美（**綾子**）そうじゃない、おばさん。みんな、ここへ戻っているの。母さんのいるここへ。

スミ（**静江**）ううん、いいの。寒いばかりの、冷たい人たちばかりのこんなところへ帰ってこなくたっていい……そうだ、うちのお父さんもそっちへ行ったのかも。

春美（**綾子**）おばさん。

スミ（**静江**）私も……。

春美（**綾子**）おばさん……。

暗転。

8

『南の島のオンバシラ』
昭和三十四年、十二月。東京。
中澤春美（綾子）二十八歳と牛山次郎（小沢）、三十四歳。

次郎（小沢） 春ちゃん、変わらんなあ。

春美（綾子） 次郎さん。

次郎（小沢） 変わらんなんて言っちゃ失礼だ（笑）。いや見違えた。お転婆がすっかりきれいになった。都会で暮らすとこんなに垢ぬけるのか……何年ぶりだ？

春美（綾子） 十六年。

次郎（小沢） 十六年か。そんなになるのか。

春美（綾子） 何をしてたの？

次郎（小沢） 最初はごたぶんにもれず闇屋の手先。それから……。

春美（綾子） どうしてすぐ帰ってこなかったの？　生きていたのならどうして？

次郎（小沢） 兄さんがテニアンにいたことを知ったのは戦争が終わってからだ。テニアン玉砕の話はトラック島にいた俺たちにも伝わっていたが、まさか五十連隊だったなんて……テニアンでは民間人も義勇軍になって死んだ。女子供は追いつめられて崖から海へ飛び降りた。自決したものも大勢いる。一万人近くいた兵隊は全滅。兄さんが生きている可能性は……。

春美（綾子） おばさんのところへ紙きれの入った箱が届いた。

次郎（小沢） 戻る前にテニアンで兄さんの骨をさがしたかった。遺品のひとつも持ち帰りたかった。だが、米軍の基地になった島に立ち寄れるはずもない。

春美（綾子） あの島からＢ２９が飛んで本土を空襲したの。

次郎（小沢） 広島と長崎に原爆を落とした飛行機もあそこからだ。そんなこと、俺たちはまったく知らないでいた。

春美（綾子） ……。

次郎（小沢）二十年の十一月、島に駆逐艦が迎えに来て、それに乗って内地に戻った。でもすぐには帰れなかった。トラック島で死んだ仲間の遺品を遺族に届けなきゃならなかった……二か月以上かかった。ほとんど歩いて回ったんだ。それを済ませて諏訪に着いたのは翌年の一月二十八日。

春美（綾子）おばさんが亡くなったのは十二月七日。

次郎（小沢）父さんの命日だ。

春美（綾子）もう少し早く帰っていれば、それが無理でも、生きていることを連絡してくれさえすれば、おばさんは死なずにすんだ。湖水に入ったりしなかった。

次郎（小沢）……。

春美（綾子）死ななかったのに。

次郎（小沢）家へ帰る前に同じ中隊にいた有賀の家に寄った……そこで聞かされた。

春美（綾子）三郎のことも？

次郎（小沢）オンバシラに足を潰されて、それがもとで死んだって……兄さんがテニアンで死んだのはおそらく八月三日。同じ頃だ……そんなとき、俺は島で。

春美（綾子）何？

次郎（小沢）俺は島で……オンバシラの真似ごとをしていた。

春美（綾子）オンバシラ……。

次郎（小沢）ほかの大隊の諏訪出身者にも声をかけた。伊那や松本にも。五十人ばかりで丸太の大砲に綱をつけて曳いた。米軍機に狙い撃ちされるぞって脅されたけど、俺たちは平気だった。これはオンバシラだ。神様の木だ。神様が撃たれるわけがない。上の連中は怒るよりもあきれていた。幹部将校に諏訪の人がいて、さすがに一緒に曳きはしなかったがかばってくれた。「諏訪大明神は軍神でありますから、兵の士気を鼓舞する上でもよろしいかと」……俺は木遣りを……そんなことをしてたんだ。同じ郷土の、同じ松本連隊が出自の、兄さんの

五十連隊が闇に紛れて米軍の本陣に切り込み、壮絶な最期を遂げたその頃……。

春美（**綾子**）次郎さんだって戦ってた。

次郎（**小沢**）俺たちが戦ったのは米軍ではなく餓えだった。輸送船が沈められ、トラック島にたどり着くまでは地獄だったし、最初の頃こそ毎日のように空からの攻撃があったが、そのうちまともに攻めてこなくなった。備えを固めても上陸してくる気配すらない。降ってくるのは投降をすすめるビラぐらいになった。みんな、食うに必死で戦争のことなどどうでもよくなった。

春美（**綾子**）……。

次郎（**小沢**）トラック島は大小二十ばかりの島の集まりだ。島には曜日の名がつけられていた。月曜島、火曜島、水曜島、木曜島、金曜、土曜、日曜……それから春島、夏島、秋島に冬島。

春美（**綾子**）……。

次郎（**小沢**）大きいとはいってもたいしたことはない。俺のいた春島で周囲はわずか十六キロ。諏訪湖より狭い。

春美（**綾子**）春島……。

次郎（**小沢**）春ちゃんの春。下社春宮の春だ……そこでオンバシラをやったんだよ。

春美（**綾子**）……。

次郎（**小沢**）機銃で撃たれて動けなかった有賀をオンバシラに乗せてやった。有賀はぼろぼろ涙流して、もう思い残すことはないって。それからまもなく傷口から入った黴菌のせいで……有賀の親父は、「次郎さん、ありがとう」って。でも、おふくろさんを泣かせてしまった……春ちゃん、俺は兄さんや三郎に恥ずかしかった。

春美（**綾子**）おばさんに私、次郎さんは絶対帰ってくるって言ったのに……私、おばさんが変な気を起こさないようにしょっちゅう家にいった。そのうちにおばさん、明るい顔になって、「春ちゃん、もう大丈夫」、そう言ってたから……。

次郎（小沢）うちは借家だったから何も残ってなかった。俺たちのものはすっかり片付けられていた……墓へ行った。父さんと兄さんと弟が眠っている墓に……母さんの四十九日さえしてやれなんだ……一晩中そこにいたよ。寒さも感じなかった。いっそ凍えてしまえば、俺も一緒に……。

春美（綾子）なぜ私を訪ねてくれなかったの。

次郎（小沢）誰にも会いたくなかった。誰にも俺が生きていることを知られたくなかった。もうここには俺のいる場所がない。もう諏訪には戻るまい。できるだけ遠くにいって、そこから寺に金を送って、家族の供養をしてもらおうって。

春美（綾子）そんなの……。

次郎（小沢）歩兵百五十連隊の生き残り。牛山家のたった一人の生き残り……そうじゃない。死に損ないだ。百五十連隊の死に損ない。牛山家の死に損ない。そんなやつはもう故郷にいちゃいけない。

春美（綾子）三郎は兄さんたちが帰ってきたら自慢できるように頑張るっていってた。子供たちでもちゃんとオンバシラをやり遂げるって。絶対中止になんかさせない。千年の伝統を途絶えさせたら、兄さんたちに顔向けできないって。

次郎（小沢）ここにいればまたオンバシラの年が巡ってくる。そのたびに俺は悔やまねばならない。

春美（綾子）有賀さんのお父さんから、次郎さんがきたことを聞いたのは次の年のお盆だった。

次郎（小沢）……。

春美（綾子）それからどうしたの？　ずっと東京にいたの？

次郎（小沢）いろんなとこを。日本中。

春美（綾子）それから一度も……。

次郎（小沢）昭和二十五年には福岡にいた。軍隊で上官だった人のもとで働いていた。何だかんだいったって、軍隊時代の人脈し

か頼れるものはない。オンバシラのことなんかすっかり忘れてたよ……いや、忘れてはいなかった。必死に忘れようとしてた。でも三十一年には……。

春美（綾子） 戻ったの？

次郎（小沢） 墓参りを口実に……春ちゃんにも会いたかったし。

春美（綾子） 東京にいたわ。

次郎（小沢） ああ、いなかったね……誰にも知られぬよう顔を隠してオンバシラを見にいったよ。三郎が大怪我をした谷までいった。そこには、そのとき元綱に乗って曳行の指示をしていた町長の、転落死した下諏訪町長の殉職碑が立っていた。立派なもんだ。オンバシラで死んだ人はそれまでも大勢いたはずだが、碑まで建ててもらったのはあの人だけだ。それがいけないっていうんじゃない。でもオンバシラで怪我をしてもみんな黙っていただろ。死んだ人の身内なんて、まるで悪いことでもしたかのように身をひそめ、弔いさえ公にしなかった。神様が犠牲を求めたのだからしかたがないって。それが町長さんだけは特別か。時代が変わったのかな。そうだよな、今じゃ女だって法被着てオンバシラ曳いてる……三郎もオンバシラで死んだんだ。三郎は子供だから数のうちじゃないのか？　オンバシラに飛び乗って一緒に坂から転げ落ちる連中や建御柱で振り落とされる命知らずとは違うんだ。三郎は俺たちのかわりに曳いたんだ。俺たちの身代わりになったんだ。名誉の戦死じゃないのか……三郎は母さんの宝だった……それが無駄死にか。結局、犬死にか……春ちゃん、俺は南の海で、南の島で、何千何万の犬死にを見てきた。

春美（綾子） 人が死んだのは戦地だけじゃないわ。

次郎（小沢） ああ、何百万人も。日本人は戦争という巨大なオンバシラを曳かされた

んだ。崖から突き落とされ、なぎ倒され、潰されたんだ。みんな……殺されたんだ。

春美（**綾子**）……。

次郎（**小沢**）木遣りが聞こえた。懐かしかった。父さんを思い出した。昔のことを。家族のことを……それから、俺たちが南の島で歌った下手くそな木遣り……せつなかった……それが突然、そんな思いを、あざ笑うかのようにラッパが鳴り響いた。突撃ラッパだ……忘れちまったのか！

春美（**綾子**）次郎さん。

次郎（**小沢**）あのラッパが兵士らに、あのラッパが無謀な突撃を強いたことを、ふりそそぐ弾の前に身をさらさせたことを忘れちまったのか……兄さんだって。

春美（**綾子**）やめて。

次郎（**小沢**）忌わしいラッパの音と歓声を聞いたとき、二度と帰らないと決めた。ここはもう帰るところじゃない。

春美（**綾子**）……。

次郎（**小沢**）帰るところじゃない。

春美（**綾子**）……次郎さん、昭和十九年の一月二十一日。松本駅から百五十連隊を乗せた軍用列車が出発しましたね。

次郎（**小沢**）広島の宇品に向かった。そこから輸送船に乗って……。

春美（**綾子**）その朝、列車を見送ろうと三郎とおばさんは塩尻駅へ向かいました。まだ暗い道を二人は歩いていきました。三郎は丈夫でないおばさんをかばいながら。本当に列車が通るのかわからない。無駄骨になってしまうかもしれない。それでもいいから行きたいと、おばさんは言ったそうです。駅には入れないから近くの踏切のそばに二人は二時間も立っていたといいます。さぞ体が冷えたことでしょう。でも二人はじっと待っていた。七時を過ぎた頃、やっと軍用列車が通りました。デッキで煙草を吸う兵隊さんが大勢見えたそうです。あの中に次郎兄さんがいるはずだ。二人は必死に

目をこらしたといいます。でも次郎さんを見つけることはできなかった。「大丈夫、きっと兄さんの方で僕らを見つけてくれたさ」、三郎はそういっていました。「次郎兄さんは勘のいい人だもの。絶対に僕と母さんを見つけたよ」って……。

次郎、その場に崩れる。
暗転。

9

『南の島のオンバシラ』
昭和四十八年八月。
諏訪大社・下社春宮の境内。
四二歳になった中澤春美（綾子）と同じく四二歳のマルコ（直子）。

春美（綾子） 日本語がお上手ですね。
マルコ（直子） 島民学校で習いました。忘れないものですね。チャモロは日本人にされたのです。二等国民ですが（笑）。
春美（綾子） どうして私のこと。
マルコ（直子） 写真です。
春美（綾子） 写真？
マルコ（直子） タロー少尉に見せてもらいました。
春美（綾子） 牛山太郎少尉？
マルコ（直子） はい、そうです。僕は日本軍でタロー少尉の手伝いをしていました。タロー少尉は土人の子供の僕を可愛がってくれました。いろんなものをもらいました。いろんな話をしてくれました。日本の話、オンバシラの話。
春美（綾子） オンバシラ……。
マルコ（直子） オンバシラの話はおもしろかった。すごいお祭りと思いました。いつかマルコに見せてやりたい、タロー少尉はいいました。

春美（綾子）どんな写真？

マルコ（直子）タロー少尉が身につけていた写真を僕に見せてくれました。そこは神社でした。テニアンにも神社があります。鳥居もあります。鳥居の下にタロー少尉のファミリーが……家族が並んでいました。タロー少尉、お母さん、弟の次郎さん、三郎さん。三郎さんは僕と同じ十四歳。その隣にいたのが……。

春美（綾子）私。

マルコ（直子）近所の女の子で、春ちゃんだと教えてくれました。春は英語でスプリングですね。でもテニアンには春がないからわからない（笑）。

春美（綾子）あれは太郎さんが出征する時、ここで撮ったの……寒い頃、二月だったかしら。

マルコ（直子）地面や屋根が白いカーテンでおおわれていました。タロー少尉が、これは雪だと教えてくれました。僕は雪を見たことがなかった。

春美（綾子）春ちゃんも家族のようなものだから一緒にって。

マルコ（直子）写真にお父さんは写っていなかった。僕は写真を撮ったのがお父さんと思ったのです。でも違った。タロー少尉の家にはお父さんはいなかった。僕と同じです。僕は母さんと二人の妹と暮らしていました。だからタロー少尉は僕を可愛がってくれたんです……タロー少尉は僕に言いました。じきに米軍が上陸してくる。米軍はチャモロと日本人の区別がつかないから、巻き添えをくわぬよう母さんと妹を連れ、食べ物と水を持って山の洞窟に隠れろ。七月、米軍が上陸を始めました。爆弾が落ちてきました。たくさん、ほんとうにたくさん。タロー少尉の言ったとおり、日本人だけでなくチャモロも大勢死にました。でも僕も母さんも妹も無事でした。

春美（綾子）太郎さんは……。

マルコ（直子）わかりません。日本軍は全滅した。そう聞かされました。タロー少尉が生きていたら、きっと僕のところへくる……テニアンは死体だらけでした。死体のにおいが島をおおい、米軍はそれを消すためたくさん薬をまきました。しばらくたって、僕はタロー少尉をさがしました。でも見つからなかった。見逃していたかもしれません……戦争が終わって三十年たつのに、まだ島には遺骨がたくさんあります。日本人は、日本の家族はなぜさがしにこないのか。待っているんじゃないでしょうか。骨はこわれて、誰のものかわからなくなっています……僕は今でも時間があるとさがしています。タロー少尉をさがしています。そんなことをするチャモロはいないと言われます。馬鹿だといわれます。でもタロー少尉は僕の大切な……フレンド……友だちでした。チャモロよりやさしかった。早く逃げろといって、僕と家族を救ってくれた恩人なのです。

春美（綾子）私たちだって、太郎さんのことを忘れたわけじゃない。

マルコ（直子）タロー少尉はオンバシラの話をしてくれました。オンバシラがどれだけすごいか、どれだけみんなに愛されているか。サルとトラの、六年に一度のお祭りなのに、戦争で参加できないことをくやしがっていました。オンバシラはちゃんと立ったか、心配していました。

春美（綾子）太郎さん……。

マルコ（直子）家族のうしろにオンバシラが写っていました。太い柱が立って……（柱を見上げ）これですね。これと同じ。日本に来て、本物を見ると思わなかった……ここに神様がいるのですか？

春美（綾子）ええ。

マルコ（直子）昔、島にはチャモロの神様がいました。

春美（綾子）……。

マルコ（直子）でも日本の神様が来て、チャモロの神様は国譲りをしました……それからアメリカの神様が来ました。今はアメリカです。チャモロの神様はどこへいったんでしょうね（笑）。

春美（綾子）……ごめんなさい。

マルコ（直子）どうして？

春美（綾子）あなたたちの神様を……。

マルコ（直子）弱いからしかたないです（笑）……リトルリーグの大会があって、島の子供たちが日本の試合に出られることになったのです。僕の子供が選手なので、つきそいで来ることになりました。ほんとはチームの世話をしなければならないのに、エスケープしました（笑）……オンバシラのお祭り、見たかった。でも来年なんですね。残念です。

春美（綾子）私のことは？

マルコ（直子）サイパンの遺骨収集をすすめている長野のお坊さんにさがしてもらいました。タロー少尉の家族がもう誰もいないことを知りました。あなただけ。

春美（綾子）……。

マルコ（直子）変わりませんね。

春美（綾子）え？

マルコ（直子）レディに失礼ですね。でも三十年前の写真と同じ。すぐあなたとわかりました。

春美（綾子）……。

マルコ（直子）（境内のオンバシラを見て）ほんとうに太い。大木ですね。戦艦ヤマトの主砲より太いとタロー少尉はいいました。ほんとうに太い。

春美（綾子）あなたと同じ歳だった末っ子の三郎はオンバシラで大怪我をして、それがもとで死にました。太郎さんが死んだのと同じ八月に。

マルコ（直子）そうですか。

春美（綾子）二番目の次郎さんはトラック島から生きて帰ってきました。今も生きてい

ると思います。この国のどこかで。でももうここへは帰ってきません。

マルコ（直子） オンバシラがあるのに？

春美（綾子） オンバシラがあるから。

マルコ（直子） タロー少尉にキヤリを教わりました。

春美（綾子） 木遣り？

マルコ（直子） ココロソロエテ、オネガイダ。

春美（綾子） ……。

マルコ（直子） ベースボールの応援で、僕はキヤリをします。みんな変な顔で見ますよ。タローなんか、「パパ、おかしな声出すのやめてよ」って（笑）。

春美（綾子） タロー？

マルコ（直子） 息子の名前です。タローといいます。ワイフはその名前、賛成でなかった。ワイフは日本も日本人も、日本の兵隊も好きでなかった。家族も親戚も死にましたから。

春美（綾子） マルコさん……。

マルコ（直子） タローも来てるんですよ。十四歳になります。

春美（綾子） 十四歳……。

マルコ（直子） さっきまでそこらを、うろちょろしてたんですが……タローに会ってください……タロー、タロー。

息子をさがすマルコの後ろ姿をじっと見ている春美。

暗転。

10

明りが入ると舞台A面。

黒木と岡崎。

岡崎 帰らんのか。

黒木 え？

岡崎 浜野は帰ってきた。

黒木　あいつはおふくろさんの世話があるから。俺はこっちにもう家もないし、墓があるわけでもないし。何より仕事がない。

岡崎　仕事なんて何とかなるさ。なんだったらうちでつかってやるぞ。

黒木　俺じゃ役に立たんよ。

岡崎　漬物屋なんてごめんか。

黒木　野沢菜は好きでよく買って食べるよ。でも東京で売ってるのはうまくない。

岡崎　あたりまえだ……オンバシラ、東京にいて気にならんか？

黒木　そんなことはない。この頃じゃテレビでもよくとりあげるし。

岡崎　テレビなんて。

黒木　まあな。

岡崎　離婚したんだって。

黒木　ああ。

岡崎　再婚しないのか。

黒木　そういう話は全くない。

岡崎　綾子がいる。

黒木　あいつが気を悪くするぞ。

岡崎　これまで何度か同窓会があったのに、あいつは顔を出そうともしなかった。おまえや小沢や静江のようにこっちにいないならしかたないが、あいつはずっとこっちにいる。それが今度にかぎって出てきた。

黒木　俺と同じ理由だろ。北中が廃校になったから。それだけさ。

岡崎　そうかな。やっぱりおまえが出るからじゃないのか。

黒木　かんぐりすぎだ。

岡崎　おまえと綾子はもう何のわだかまりもないのか。

黒木　ないよ、何もない。

岡崎　向こうはあるかもな。

黒木　向こうもないよ。

岡崎　……知ってるか、綾子の母親のこと。

黒木　知ってるよ、もう亡くなったが。

岡崎　おまえの知ってる人じゃない。本当の母親だ。

黒木　どういうことだ？

岡崎　うちの従業員に綾子の親戚がいるんだ。綾子の親戚ということは、関口先生の親戚でもある。

黒木　まさか……。

岡崎　そのまさかだ。綾子は関口先生が東京にいたとき産んだ子だ。それを子供ができなかった従姉がひきとった。

黒木　そのこと綾子は……。

岡崎　自分が養女だったことぐらい前から知っていただろ。戸籍を見る機会はあるしな。だが、本当の母親が関口先生だってことまでは知らなかったろ。俺に教えてくれたやつだって、綾子がもらわれてきたことは知っていたが、それが先生だとは……。

黒木　なぜわかったんだ。

岡崎　先生がしゃべったんだ。先生と綾子の両親とじいさんばあさんだけの秘密をしゃべっちまったんだ。先生は認知症だ。秘密を守ることなんてできなくなってる。

黒木　じゃあ、綾子も。

岡崎　もう知ってるだろうな。先生は結婚していたわけじゃない。不倫なのか、捨てられたのか。おそらくこっちへは帰らないつもりだったんだろ。でも帰ってきた。近くで娘を見守っていたいと思ったんだ。おまえにはわからんだろうが、それが親の気持ちってもんだ。

黒木　……。

岡崎　俺は昔から妙に思っていた。自分の親戚で、クラス一の優等生を先生はまったく贔屓しなかった。それどころか冷淡、いや厳しかった。けじめをつける先生らしいといえばそうだが、おまえのように特別に可愛がられた生徒もいたのに。

黒木　母子家庭だから同情されていただけだ。

岡崎　……病院に行ったんだよ。同窓会を開くことを報告に。案の定、俺のことなんてろくに覚えてなかったがな。

黒木　出れないことはわかってたくせに。

岡崎　確かめたかったんだ。

黒木　何を確かめるんだ？

岡崎　先生の相手、綾子の父親が誰か。

黒木　おまえの知ったことじゃない。

岡崎　答えは『南の島のオンバシラ』にあった。あれはほんとうにあったことだ。実際の話なんだ。中澤春美は先生だ。

黒木　岡崎、おまえが他人の秘密をほじくり出す理由はなんだ。

岡崎　俺は今でも綾子が……。

黒木　女房も子供もいるやつが、いつまで寝ぼけたこといってるんだ！

岡崎　俺の中で綾子は変わらないんだよ。中学の頃からずっと変わらない。これからもだ。あいつが婆さんになっても変わらないだろう。おかしいか？　綾子と恋人同士になって、別れたおまえにはわからない。おまえの中では綾子は青春時代の淡い思い出とか、そんなものなんだろう。盲腸を切ったようなものか？　俺にとってあいつは体に巣くった癌なんだ。切除してもいつのまにか転移して再発する。

黒木　岡崎、おかしいよ。

岡崎　おまえにはわからん。

黒木　じゃあ家族を捨てて、いろんなものをすべて投げうって、綾子にプロポーズでも何でもすればいいだろ。

岡崎　綾子は俺にはふりむかない。

黒木　何だよ、それ。

岡崎　おまえを待ってるんだ。

黒木　俺たちは別れたんだ。十六年も前だ。

岡崎　綾子が好きでもないこの町にいるのは、おまえが帰ってくるのを待つためだ。

黒木　馬鹿馬鹿しい。それこそ妄想だ。

岡崎　おまえは最近まで結婚していたし、こっちへ戻るわけがない。綾子だってわかってたさ。でも俺と同じなんだ。あてもなく待つしかないんだ。馬鹿なこととわかっていても、そうするしかないんだ。

黒木　思い込みだ。そんなのは岡崎の思い込

みだ。

岡崎　関口先生と同じだ。先生も待っていたんだ。

黒木　誰を？

岡崎　牛山次郎を。

黒木　え？

岡崎　綾子の父親だ。

黒木　……。

岡崎　先生は東京で牛山次郎と偶然会ったんだ。昭和三十四年の暮に。そして昭和三十六年の春、先生は女の子を産んだ。牛山次郎の子だ。そのとき先生のそばに次郎はいなかった。妊娠のことさえ知らなかったんだろ。それでも先生は産んだ。

黒木　先生がそういったのか。

岡崎　……。

黒木　綾子も知ってるのか。

岡崎　……牛山次郎は先生より六つ年上。まだどこかで生きているかも知れない。

黒木　先生が次郎と……。

溶暗。

明かり舞台B面。

小沢　久しぶりだな。

静江　ほんと。小沢君は全然変わらないね。

小沢　そうか。

静江　昔から飄々として、何があっても我関せず、我が道を行くっていうか。大人だったのかな。

小沢　そんなにひねこびてた？

静江　ちょっと斜に構えて。

小沢　道化だね。

静江　何もかもお見通しって感じで、こわかったわ。

小沢　こわがられてたのか。そりゃ作戦失敗だった。これでも俺はみんなが綾子綾子っていう中で静江に一票入れてたんだぜ。

静江　嘘ばっかり。

小沢　嘘じゃない。浜野に聞いてみろ。静江は今はあまり目立たないが、目鼻立ちが整ってるから娘盛りになるときれいになる。大化けするぞって。

静江　何、それ。人を狐みたいに。

小沢　先物買いの推奨銘柄。

静江　生意気な中学生……でも小沢君、結局買ってくれなかったじゃない。

小沢　黒木がいたからな。俺は最初から負ける勝負はしない。

静江　黒木君は綾子さんと。

小沢　静江はわかりやすい。気持ちを隠せないタイプだ。

静江　……。

小沢　そんなことないって言わないんだな。

静江　あの頃、クラスの女子はみんな黒木君に憧れてたのよ。

小沢　どうして今度の同窓会に顔を出そうと思ったんだ？

静江　だって廃校になったから。

小沢　そうか（笑）。

静江　だいぶ歳もとったし……小沢君はどうなのよ。小沢君だってひさしぶりなんじゃないの。

小沢　俺は浜野が帰ったって聞いたからだ。それにあの黒木が出席するというし。おまけに綾子までお出ましというんだから、何をおいても来ないわけにはいかん。

静江　……。

小沢　北中が廃校になったからなんて理由で出てきたのは黒木ぐらいだぜ。

静江　ほんとに？

小沢　黒木はいいやつなんだが、人の気持ちを察する能力に欠けている。綾子とうまくいかなくなったのもあいつが鈍感だったからだ。悪気がないからたちが悪い。奥さんとダメになったのもそこらが原因だろ。まあ、誰にでも欠点はある。だが、やつの鈍感さは罪つくりだ。

静江　めちゃくちゃ言うのね。親友だと思ってたのに。

小沢　親友だよ。親友だから言える。親友だから腹も立つ。親友だから心配してる。

静江　男の人たちのことはわからないわ。

小沢　……これが最後の同窓会だろうな。

静江　そうね。

小沢　誰もがそう思ってる……静江も黒木に会うのはこれが最後だと。

静江　どうして黒木君なの。

小沢　違うのか？

静江　……。

小沢　俺は高校も大学時代も黒木と一緒だった。社会人になって俺はすぐ東京を離れたが、やっとはずっとつきあいがあった。

静江　……。

小沢　本社に用事で来ると、必ず黒木を呼び出した。二七歳だったな。突然おまえの話が出てきた。つきあい始めたような、そんな言い方だった。歳まで覚えているは次の年に平成が始まったからだ。やつに俺の気持ちなんて知る由もない。まあ、それはそれでいいと思った。静江が黒木に惚れていたことは知っていたし、その頃には綾子と別れていたんだから何の問題もない。

静江　私は……。

小沢　だがその後、おまえが別の男と結婚したと聞かされた……相手が黒木だからしかたないと思ったのに、正直自分に腹が立った。

静江　……。

小沢　さすがの俺も黒木に問いただしたよ。そしたら、おまえと会ったのはたったの二度で、その後ぷっつりと連絡がつかなくなったって……俺は黒木に言ってやった。「静江はすぐにおまえが案外つまらん男だと見抜いたんだよ。百年の恋が覚めたんだよ。それでさっさと逃げ出したんだ」。

静江　そんなこと……。

小沢　そんなことはない。おまえはそういう

女じゃないものな。何かあったはずだ……気になっていたが、そのうち忘れてしまった……五年ほど前の話だ。社外のセミナーでおまえが当時勤めていた会社のやつと同じグループになったんだ。その男はおまえのことを覚えていた。そいつがこんなことを言ったんだ……おまえは当時、同僚だった今の旦那と婚約していた。式の日まで決まっていた。ところが、急におまえの方から取りやめたいと。

静江　……。

小沢　それがちょうど、おまえが黒木と会っていた時期と重なる。

静江　勝手な想像しないで。

小沢　結局、婚約破棄は撤回されて、おまえは今の旦那と一緒になった……別に迷ったことをどうこう言ってるんじゃない。正しい判断だったんだろ。

静江　そんなんじゃないわ。あの人が……。

小沢　あの人？

静江　……。

小沢　直子がさっき教えてくれたよ。「静江さんの子供、和彦君っていうんだって。黒木君と同じ。お義父さんがつけたなんて言ってたけど、あれは嘘。静江さんも黒木君のこと好きだったのね」。

静江　……。

小沢　十四歳だって？

静江　……夫がつけた。

小沢　え？

静江　夫がつけたの。和彦って。私にことわりもなしに勝手に出生届を出してきた。知ってたの。私が結婚をやめると言いだしたときに調べたの。

小沢　黒木のことをか？

静江　自分の子じゃないと思ってる。

小沢　……。

静江　だからそれは、私への……。

小沢　……。

暗転。

スポット、浜野。

11

浜野　昭和十九年は、翌昭和二十年にもまして日本にとって日本人にとって悲惨な出来事が数多く起こった年でした。昭和二十年には本土空襲、沖縄戦、原爆、大陸からの引揚で民間人に多くの犠牲が出たのに対し、とりわけ南方の戦で何十万もの兵士が国に捨てられるようにしてむごたらしい最期を遂げました。玉砕の島にはいまだ収集されない無数の遺骨が残されています……その昭和十九年は、七年毎に巡ってくる諏訪大社のオンバシラの年でした。祭りの主役の若者は皆出征していました。千年余も続けられてきた祭りも中止やむなしとなるところでしたが、老人と少年たち、そして女たちの献身によって伝統を途絶えさせずにすみました……優雅さとか洗練とは程遠い、粗野にして狂おしく、ただただ熱いばかりの祭り。太古の荒らぶる神々と祖先らの魂がよみがえる祭り。獰猛な獣のような巨木を山奥から引きずり出し、綱をつけて曳き回し、崖から落とし、川を渡らせ、社の庭に突き立てるという命がけの戦……諏訪の人々の人生の節目にして、人生のすべてでもある存在。愛され、そしてうとまれもした祭り。愛され、そしてうとまれもした故郷そのもの……南の島で、南の海で、散っていった諏訪出身の兵士たちが、オンバシラの年を忘れるはずはありません。銃弾の飛び交う中にあっても、爆撃に怯えながらも、マラリアの熱や飢えに苦しみながらも、片時も頭から離れることはなかったでしょう。血まみれになって息を引き取るそのときでさえ、力つき

て海に沈むそのときでさえ、その耳にオンバシラの木遣歌が聞こえていたはずです。

溶暗。

舞台A面。

12

綾子　オンバシラは六年に一度、なのに七年に一度と思い込んでいる人がいる。七年毎に巡ってくるというのだけれど……どうして七年にこだわるのか、六年ではまずいのか。不思議だった。でもやっとわかった。

黒木　何がわかったんだ。

綾子　隠したいの。

黒木　……。

綾子　うやむやにしたいの。人にはどうしても忘れてしまいたい年、思い出すのがつらい年、耐えられないほど哀しい年があって、それを隠そうとするの。その年をなかったことにするの。オンバシラを七年毎というのは、その一年を隠してしまうため。

黒木　何を言ってるんだ。

綾子　春美にとってそれは昭和十九年？　それとも私を産んだ昭和三十六年？

黒木　先生が忘れたかった年だというのか。

綾子　和彦。

黒木　……。

綾子　あの頃、私、そう呼んでいたじゃない……昭和六四年一月。七日に昭和は終り、平成が始まった八日。朝一番の列車で松本駅を出た。寒い日だった。中央線を岡谷、下諏訪、諏訪、茅野……故郷の諏訪盆地を通りすぎ東京へ向かった。百五十連隊の兵士のように不安な気持ちと覚悟を抱いて。あなたと別れて半年も経っていたけれど、私はもう一度やり直したかった……新宿駅へ着くとすぐアパートへ向かった。留守

かも知れない。なら待つつもりでいた。ずっと……でも、あなたの部屋のベランダで女の人が干し物をしていた……知っている人だった……そのまま駅へ戻った。私の顔、見られてないと思ってた……見られてたのね。そうでなきゃ……ほら、私にだって、なかったことにしたい年がある。

黒木　そんなことが……。

綾子　自分がもらわれたことは高校生の頃に知ったわ。本当の親なんてどうでもよかった。母が病気になって私を呼び寄せて、最期のときに教えてくれた。あの人が母親だって。そんなに驚かなかった。ショックでもなかった……それでいろんなことに合点がいったわ。人生はジグソーパズルを解くようなもの。謎だったピースがどこに入るかある日わかって、あとはそれにつながるピースをさがすだけ。そのヒントがあの劇にあることはわかっていた……でも、どうしてもわからないことが一つあった。あの人は誰を待っていたのか。

黒木　……牛山次郎だ。先生は天文観測が好きだった次郎を彗星になぞらえた。

綾子　七年毎に巡ってくる。

黒木　違うか？

綾子　違うわ。牛山次郎はここへは二度と戻らなかったの。

黒木　先生がそう言ったのか？

綾子　もし牛山次郎を待つつもりなら、私を手放したりはしない。

黒木　じゃあ、誰なんだ。

綾子　頭が変になったあの人は、和彦、あなたのことばかり話すの。大勢いる教え子の中で、あなたのことばかり。

黒木　……。

綾子　あなたが三郎だから。

黒木　あれは劇の……。

綾子　あなたは最初から三郎だったの。あの人にとって、あなたは黒木和彦でなくて牛山三郎だったの。あの劇はあの人があなた

のために書いたの。

黒木　そんなわけない。

綾子　テニアンの島民に出会ったから書こうと思ったんじゃない。それがきっかけじゃない……あなたに出会ったから。

黒木　なぜ？

綾子　懺悔……そう、懺悔のような。

黒木　何を懺悔するんだ。

綾子　日本武尊（ヤマトタケル）は伊吹山の神に足を傷つけられ、それがもとで死ぬの。三郎と同じ……日本武尊が命を落としたのは、不浄の美夜受比売（ミヤズヒメ）と契ったため。「汝が著（け）せる襲（おすひ）の裾に月立ちにけり」……あの人は古事記のその話を知って、三郎が死んだのは自分のせいだと思うようになった。

黒木　先生と三郎と何があったんだ。

綾子　春美は三郎がオンバシラで怪我をしないように、出かけるときにお守りを渡した。弟を気遣う姉のように……。

黒木　出征兵士がもらう弾よけの……。

綾子　それって一体何だろうねって、私たち言ってたじゃない……あれはね、あれは処女の、あれは女の大事なところの……春美はそれが穢れていたことに、御守り袋が血で汚れていたことにあとから気づいた。

黒木　月立ち……。

綾子　あの人は待っていた。三郎を。

黒木　俺が三郎の生まれ変わりだとでもいうのか。

綾子　私たちは十四歳だった。

黒木　綾子、変だよ。

綾子　狂っていたの。あの人はずっと前から。木落としの坂の上にいたの。

黒木　綾子。

綾子　今年のオンバシラには来て。

黒木　え？

綾子　必ず来て。

黒木　どうして？

綾子　十四歳だから。

黒木　十四歳が何だっていうんだ。

綾子　あなたは会うの、和彦。会わなくちゃならないの。

黒木　誰に？

綾子　十四歳のあなたに。

二人の後、舞台B面に直子、岡崎、小沢、浜野、静江が並んでいる。

直子　マルコは一つだけ嘘をついていました。それはタロー少尉の亡骸を見つけていたこと。マルコは少尉を岬の先に葬りました。そこは日本の方向にありました。なぜ春美に本当のことを言わなかったのか……写真のことを話せなかったからです。タロー少尉が肌身離さず持っていた家族写真。遺品も少尉と一緒に埋めたのですが、少年はそれだけは手元に置きました。

岡崎　テニアン島でとれる砂糖のような雪がうっすら積もった春宮。牛山家の三兄弟と母、そして少女。

小沢　マルコはその写真を枕元におきました。少尉が故郷と家族をいつも夢見ていたようにマルコも夢を見ました。でも少年の夢に出てきたのは一番端っこにいた、ちょっとはにかんだ少女でした。

浜野　牛山少尉はマルコに雪の話をしてくれました。雪ダルマや雪合戦の話をしてくれました。それでマルコの夢の中では、雪ダルマの軍隊をひきいた少女が雪合戦を挑んでくるのです。雪のたまがスコールのようにマルコにふりそそぎます。大方うまくかわしたのですが、よけ損ねた一発が額にあたりました。あたっても何ともないはずが、痛いのです。額から少し血も出ています。見ると、雪のたまの中に少尉の慰問袋にあった固いカチグリが入っていました。少女は笑っていました。少年の夢の中で少女はいつも笑っていました。

静江　マルコはテニアンで唯一残った社の鳥

居から日本の方を眺めました。この海の向こう二千キロ先に、島にはない季節の名をもつ少女はいるのです……太郎少尉はマルコに御神渡り（オミワタリ）の話もしてくれました。諏訪湖が全面結氷すると、湖面の中央が盛り上がり、諏訪大社の上社と下社を結ぶ道ができます。それは下社の女神様が夫の神様のいる上社へ通う道なのだと。少年はもしこの海が氷ったら日本へつながる道ができるのかしらと、そんなことを考えていました。

七人全員で歌う『南の島のオンバシラ』のテーマ。

火炎樹の花咲く小島
ヤシの木陰に風渡り
銃を枕にしばし微睡む
鉄の鳥さえ飛ばなけりゃ
ここは南洋パラダイス
海ゆかば水漬く屍
水平線のかなたより
黒雲がやってくる
うさぎ追いしかの山から
迎えまつれオンバシラ
雷神（いかずち）の依代
小鮒釣りしかの川越えて
いざ建てんオンバシラ
千年のオベリスク
月が鏡であったなら
写してよ故郷を
星の囁き届くなら
伝えてよあの人に

歌に重ねてモノクロのスライドが映し出される。「木落とし」、「建御柱」、「里曳き」等、オンバシラのショットに「テニアン島の落日」、「米軍の艦砲射撃」、「バンザイクリフ」、「大砲の残骸」、「鍾乳洞に刻まれた遺書」、「テニアン住吉

神社」、「散乱した日本軍守備隊の遺体」、「トラック島で食事をする兵士たち」、「潜望鏡から見た沈む輸送船」、「B29の編隊」が交じる。

了

〈参考・引用文献〉

『図説御柱祭』上田正昭監修　郷土出版社
『松本連隊の最後』山本茂美著　角川文庫
『南の島の悲劇』石上正夫編　草の根出版会
『悲惨・テニアン島』伊藤孝治著　旺史社
『善光寺参りにやって来たテニアン島の少年たち』新津武（長野郷土史研究会機関誌より）